

土

淨

號 月 五

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十七年四月廿日印刷納本・昭和十七年五月一日發行

第八卷 第五號



陸海軍
病院

慰問浄土

全国の陸海軍病院に月々新刊の信仰雑誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全国津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘冊の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せずこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願い致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◆ 全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雑誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◆ 一口一圓二十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雑誌が病院へ参ります。
- ◆ 毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◆ 個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◆ 御送金は浄土宗務所事變部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

中村 辨 康 著

新 刊

日常勤行式講讀

B 6 版二百四十頁
價 一 圓 五 十 錢
送 料 十 二 錢

！ 來 出 よ い よ い 書 の 望 待
侶 伴 好 養 修 の 携 必 徒 宗 土 淨

◇本誌に連載し、好評を博した信仰の入門書！◇
◇座右に備へて日常勤行の深意を味得せられよ！◇

淨土宗でいつもお勤めしてゐるお經文に一々懇切な解説がついてゐます。即ち一々のお經文について和譯と意譯をあげ、それに字解までつけて誰にでも解るやうにして、更に著者の燃ゆる信念から湧き出た解説がついてゐます。従つて單なる解説ではなくて誰にも喜ばれる信仰の入門書です。會員各位の修養に、僧侶各位の參考資料と説教その他の教材に最適です。

發行所 法 然 上 人 鑽 仰 會

東京市芝區芝公園明照會館
振替 東京 八 二 一 八 七 番



淨土四月號 目次

表紙・扉 河村 良 豪
目次カッ ト 中 島 保

日本人さながらの佛 大野 法 道 (四)

静かな悟り 吉田 絃 二 郎 (二)

ウエッサツク祭 井上 哲 次 郎 (四)

雅樂の 多 忠 朝 (四)

戦線舞踊慰問の旅 花 柳 壽 重 (四)

法話或る夜の問答 伊 藤 宏 天 (六)

浄土隣組座談會 編 輯 部 (三)

信仰相談 中 村 辨 康 (四)

小説不孝もの 吉 野 翠 幹 (六)

童話鬼と善助 牧 野 醇 (六)

五月まん畫だより 漫 畫 協 團 (四)

歌壇 與 謝 野 晶 子 選 (九)

俳壇 太 田 耳 助 子 選 (七)

法語解説 日本國體に養はるるもの 中 村 辨 康 (五)

會のたより (四)

編輯後記 (五)



淨
土

習ひさきよりあらざれば、臨終正念もかたし。
常に臨終のおもひをなして、臥ごとくに十念をとなふべし。

法然上人御法話





歎 佛 偈 講 義 ……二…

日本人さながらの佛ほとけ

大 野 法 道

この歎佛偈「光顔巍巍として威神極りなし」に始まる二

十偈は無量壽經に掲げられるものである。この中には阿彌陀佛が本願を立てるに當り、まづ剛健無比なる決意を固めたまひしことが説かれてあるから、阿彌陀佛を信ずる淨土の教としては極めて大切な一章である。それは阿彌陀佛の本願は、この佛の生命であり、淨土の教へに於てはこの本願を通じて佛の力を感じ受けることができるのであるが、この歎佛偈の中にはその本願を生みだす心が籠つてゐるからである。

のではなく、容易ならざる決意から生み出されたものであるから、その決意の程を説くこの歎佛偈のころは充分に味はねばならぬと思ふのである。

本願のころは、昔から淨土の教へに於ては念佛の本として至れり盡せりに解釋され、殊に法然上人の選擇本願念佛集第三章は、多くの本願に關する法語と相俟つて、淨土宗の教への標準として大切であるが、更に上人は萬物をはぐくみ育てる春の光に本願を比例して、四季の歌の中に、

春

さへられぬ光もあるををしなべて

へだてかほなる朝霞かな

と詠まれ、我れ／＼に本願を感受する手近い道を與へられたことは有名である。かやうに本願に就ては常に講讀を怠

こと勿論であるが、それは簡單に一朝一夕に立てられたも

らず、念佛生活に於て、或は往生淨土に於て、いよくそのこゝろを顯はしゆくものが淨土の教へであるが、その本願の尊さは、本願を生みだす前夜の言葉としてのこの偈を味はふことによつて一層明らかにになるであらう。

二

まづ二十偈の意味を大體分けてみると、初部の七偈は仰ぐ光を説くのであり、後部の十三偈は求めるものを説くのである。この光を仰ぐことゝ、求めるものを持つといふことは、人間に取つて最も大切なことで、本當に人に生れたかひのある生活をしやうとすれば、之は一刻たりとも忘れることのできないものである。殊に世界の人類多しと雖、われ／＼は何たる慶ばしい事であるか、尊嚴無比にして無上希有なる國體をもつ國、眞に人間の尊とさを知りうる國、人生の喜びを充分に感じうる國、皇國日本に生を享け、日本人として生きる光榮を忝ふしてゐるのであり、祖先以來常にこの國と一體にまします大君を光と仰ぎまつりて、國民としての本分をいやが上にも全うすることを求めてきたのであるから、本當に生きがひのある生活を持つてゐるのである。

今こゝに淨土の教への本尊としての阿彌陀佛は、仰ぐ光によつて誓ひを固め、衆生を攝取するといふ、佛としての本分の完遂を求めて止むことなき佛であるから、日本人さながらの佛であることゝも、われ／＼日本人はこの佛を信仰することにより、一層強く且つ深く日本人としての正道を歩み得られるのであり、かくて國民としての自覺に符合する宗教に依つて安心立命を得、宗教信仰を以て國民たるの自覺を盛んに、花も實もある日本人として生きることのできるの、この上もない喜びであらねばならぬ。

三

阿彌陀佛がこの偈を説きたまひしは、未だ佛とならぬ前、法藏菩薩と申した時で、その時に世自在王佛と申す佛に出遇ひ、その佛德に感激して、仰ぐ光をそこに見出だされたのであつた。しかもその世自在王佛は前後に例なき一人ぼつちの佛ではなくて、その前に多くの佛があつた。經にはそれらの佛として五十三佛の御名が擧げてある。即ち久遠の古へに錠光佛があり、それから次ぎ／＼に、光遠佛、月光佛、梅檀香佛、善山王佛、須彌天冠佛、須彌等曜佛、月色佛、正念佛、離垢佛、無著佛、龍天佛、

夜光佛、安明頂佛、不動地佛、琉璃妙華佛、琉璃金色佛、
 金藏佛、焰光佛、焰根佛、地動佛、月像佛、日音佛、解
 脫華佛、莊嚴光明佛、海覺神通佛、水光佛、大香佛、離
 塵垢佛、捨厭意佛、寶焰佛、妙頂佛、勇立佛、功德持慧
 佛、蔽日月光佛、日月琉璃光佛、無上瑠璃光佛、最上首
 佛、菩提華佛、月明佛、日光佛、華色王佛、水月光佛、
 除癡瞋佛、度蓋行佛、淨信佛、善宿佛、威神佛、法慧佛、
 鸞音佛、師子音佛、處世佛、

が世に出られ、その次ぎが世自在王佛であつた。かやうな
 佛は前佛から後佛へと、世々に相繼ぐ教化を人の世界に顯
 はしたまふのである。

法藏菩薩は、この世々に相繼ぐ佛の道を受け紹がれた世
 自在王佛に遇つて、仰ぐ光の尊とさを感じられたのである
 が、そこに二つの意味を味はふべきである。

第一は佛と佛と相繼いで絶えることなき、無限の慈悲の
 すがたを光と見られたことである。之は仰ぐ光の尊とさは
 歴史の上にあるといふことを告げてゐる。ホンの花火のや
 うな一時的のもので、人の世に明るさと喜びを與へるも
 のは尊いにはちがひないが、それが歴史性を具へて世々に
 一貫し、代々に連續していつも渝らぬすがたとなつてこ

そ、仰ぐ光としての尊とさが確實となり、苟くも心ある者
 ならばこの尊とさを仰がずには居られないであらう。

一例をわが帝國の海軍に取れば、このたび大東亞戰の最
 初の日、布哇眞珠灣の敵艦撃沈を初めとし、つぎ／＼に舉
 げられた大捷は國民の感謝感激を絶頂に達せしめたが、實
 はそれは日露戰役の日本海々戰のバルチック艦隊全滅、日
 清戰役の黄海々戰の勝利など、世々に必らず顯はれる海軍
 魂の明らかなすがたである。この歴史の尊い事實は、皇
 國日本を明るくするものであり、時と／＼に常に生動する
 この魂は、國民をして正に仰ぐ光として全心の信頼をそ
 こに傾けしめるのである。

法藏菩薩が、仰ぐ光を五十三番目の佛としての世自在王
 佛に感ぜられたのは、佛々一貫して萬世に久しく、時につ
 れて絶えず生動する大慈悲教化の、絶え間なき事實の尊と
 さを感じたまひしことゝ拜するのである。

四

法藏菩薩が世自在王佛を仰ぐ光と感ぜられた第二の意味
 は、人に顯はされる功德の尊さである。之がまづ初めの二
 偈半に表はれてゐる。即ち、

光顔巍々として威神極りなし

是の如きの焰明は與に等しきものなし

日月と摩尼珠の光は焰明なるも

皆悉く隱蔽して猶ほ聚墨の如し

如來の容顔は世に超えて倫なし

とあるのがそれである。なるほど太陽の光は普ねく萬物を

育成し、月の光は清夜に風情を添へてものゝあはれを知ら

しめ、研ぎ出された摩尼珠の玉は、滋潤の上もなき奥ゆ

かしき彩光を放つ世間の寶である。これらは何れも尊いも

のには違ひないが、仰ぐ光としては、人に顯はされる功德

ある生活事實に過ぐるものはない。

そしてわが身の本分を全うし、あらん限りの精進を盡く

して、大慈悲の教化事實を發露するものが佛であるから、

かゝる佛こそは、人々が信仰として仰ぐ光の上乗なるもの

であらねばならぬ。

日本人に顯はされる無上功德の一例は、あの大東亞戰爭

開始の朝、布哇の眞珠灣頭に、勇猛果敢の極地に突進した

特別攻撃隊の、岩佐中佐らの九軍神にはつきりと見ること

ができるであらう。

あの豪毅にして沈着、強烈なる必中の攻撃を完了した

上、使命の成功までも通報し、從容として去りたまひし鮮やかな生活事實は、正に一億國民の心を扶つて、感謝感激の

法然上人鑽仰會編

念佛讀本

價二十錢
送料八錢

中村辨康著

信仰讀本

價二十錢
送料四錢

中里介山著

法然上人傳

價六十錢
送料八錢

藤井實應編

法然上人法語抄

價三十錢
送料四錢

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

埤塤に投じた。國にさゝぐる完全なる無上功德であり、絶大至極の武勳である。しかもこの功德なる、この武勳なる、天より降らず地より涌かず、たゞ洞徹せる國民の自覺ある、人に顯はされる生活事實である。

かゝる生活事實のもつ光には、比較すべき何物もないから、「是の如き焰明ともに等しきものなし」であり、遠く日月などの及ぶ所でないから、「日月と摩尼珠の光は焰明なるも、皆悉く隠蔽して猶ほ聚墨の如し」である。またかゝる功勳の持主は、その威容堂々として、見るからに頭が下るから、「光顔巍々として威神極まりなし」であり、また「如来の容顔は世に超えて 倫なし」である。

仰ぐ光としての佛が、人として顯はし得られる所のいかなる功德を具へたまへるか、またそれを具ふるに至るまでの努力精進が、いか程の力の籠れるものであるかは、次ぎ次ぎの偈に明らかにされる。

五

正覺の大音の響きは十方に流る
佛の具へたまへる功德は數限りなく、とても言ひ盡すことはできぬが、それを總括するものが「正覺」の一語であ

る。

正覺とは正しい自覺である。人として自覺を持たねばならぬことは、言ふまでもないが、殊に日本人としては、この國が萬邦無比なる國體を具へるだけに、最も必要缺くべからざるものである。しかもその自覺はどこまでも正しくなければならぬ。このわが身は新たに心を起して國に盡さうとなるのでなく、國家と一體にまします大君は、畏くもこの一億の民草を「おほみたから」と宣うせたまふのである。こゝに君と國とが一體で、わが身は勿體なくも亦それを離れない。従つてわが身はもはや自分ひとりの物ではなく、お國の中にあつて生かされてゐるから、全身は本來國のものであるとの自覺があるべきだと思ふ。かくて日々の生活はこの自覺を本として營むべきで、かくあつてこそ本當に、日本人としての本分を全ふする道が開かれてくるであらう。佛のさとりも結局はこの自覺の完成に外ならぬ。いかに世相が變動しても、苟くも人の世であるかぎり「正覺」こそ永遠の大切な基本であらねばならぬから、これ程大きい響きを持つものはなく、その威力は宇宙のすべてに及ぶから「正覺の大音の響は十方に流る」と言ふのである。

歌

壇



六謝野
星子選

京都府 寺田 定信

特別攻撃隊

その勳人を哭かしむ病む床に支へ

それつつ南を拜す

評 眞珠壽特別攻撃隊の壯舉は日本帝國軍人の眞精神を發揮したもので一億國民を感激奮發せしめた。作者もその一人で病床にじつとして居られず看護人に助け起してまつて遙か眞珠壽戦死の方向にむき直つてねんごろな禮拜をして勇士の功を偲び冥福を祈つたのである

山口縣 花田 法子

いとし子よ強くかしこく靖國の神と鎮まる父を繼げかし

評 作者は戦死者の未亡人である幼兒を育てて父のやうに強いかしい立派な人となれと希つてゐるその心持は切實である

北海道 山本 由馬

變りつる傷痍の我を變らずと宣ふ母を見るがせつなさ

評 戦傷を受けて變り果てた身となつた作者を母親は病院に見舞つた、むすこの心を傷けまいとしてちつとも變らぬ心をもなげに慰めてゐるその母親の心を察して息子は自分の身の苦痛よりも母の心の苦しさをせつなく思つてゐる

北海道 前野 賢一

皇恩はいともかしこし安らかに幾

年をぬる傷痍の身もて

北海道 金石 正夫

春淺く病みつる我れにかしこけれ

賞賜の御沙汰つゝしみて承く

福岡縣 西山 博

九勇士は眞珠の海にああ散りぬされど薫りぬ人の心に

新潟縣 眞佐夫

又しても大き戦果かしばらくはラ

デオの前に胸はづませつ

栃木縣 江崎 壽美江

けふ佳き日かなづる軍歌長くして

臨時ニニュースをまつ胸をどる

秋田市 羽後 眞隨

君も征くれ残されて行く冬に鎌を磨きて銃後を守らむ

京都市 葉山 千高

ああ軍神この母君の氣高くも勁き

訓への記事に涙す

長野縣 丸山 力

國あげて大御心に沿はむ道ひたぶ

る戦に勵むに如かず

大分縣 淺輪 桃舟
國母陛下し賜へる御卵子病む身に拜し涙こぼるる
北海道 由利 博
み社にわがぬかづけば大いなる日本
の鼓動ひとしと感じぬ
愛知縣 稻本 利一
いつの世も軍神あり大やまと國の柱を身をもて守る
栃木縣 白石とみ子
白衣きて永久の眠りにつける姉觀音菩薩思はするかな
長野縣 熊谷 参市
み佛となり給ひたる叔母が顔常の如くに清くうつくし
熊本縣 五野 朝弘
暮れて行く一筋の道白くして月なき空に星の輝く
奈良縣 柳田 いく子
禮拝所感
爪立ちて聲を限りにみ名呼べばこの身尊くなりぬる如し
栃木縣 大 輪 清
樵夫らも人と違ひては戦捷を語りて山の細道を行く
大坂市 植 善治
假想敵機庫裡の眞上に到るかなあな雲に入るあな雲を出づ(防空演習)

静岡縣 一向 山人
萬歳の聲とどろけば雪ふかき富士の嶺すらも動くかと見ゆ
世田谷區 小 柳 萬
空襲のサイレンうなり荒鷲の帝都を守る姿雄々しき
北海道 花田 順往
よしや身は戦の庭にはつるとも英靈永く皇國守らむ
桑名市 青木 桂山
時局下民情の御下問を拜して
京都市 永田 七郎
たはやすく人言の葉をのぶれども行ふことの如何に難きや
東京市 川村 芳雄
血を吐きて死ねてふ鳥をわれは戀ふ妹なきあとの虚なる日に
朝鮮 三浦 砂千子
切々と胸にひびきぬ獄中にすごしし人の訴へを讀む
秋田市 妹尾 馬之助
兎狩雪の山とよもして獲物争ふ村の若者

投稿規定

はがきに一回二首以内とし「淨土」編輯部歌壇係あて住所氏名明記の上送ること



静かな悟り

吉田 絃二郎

今夜もまたひどい風である。芽を出したばかりの楓が嵐に痛められることであらう。

今年は春になつて殊に風が多いやうに思はれる。

風の日は何となく落ちつかないものであり、夜は夜で、眠りをさまたげられるので、風が吹き出して来ると、「また今日も風か」と愚癡をこぼしたくなることもある。

しかし、これも心の持ち方一つである。わたくしはこのころ心の持ち方を變へてゆくように努めてゐる。

蓮月尼の

やまざとは松の聲のみきゝなれて風ふかぬ日はさびしかりけり

は有名な歌であるが、あわたゞしい風の聲もかく悟ればありがたいものとなる。

風の日にはさわがしいにはさわがしいが、まだ自由に散歩もできるし、庭に出て草をむしることもできる。わたくしはかく考へることによつて風の日をもありがたく思ふ。

風の夜は眠りがたい。しかしこのころでは、眠れないで、いろいろな思ひ出をくりかへすことにしてゐる。それは孤獨者の癖として相當骨を削るやうな思ひ出になることもあるが、生きてゐればこそ、目ざめてゐればこそ、苦しい思ひ出もあると悟れば風の夜も尊くなる。

風の日夜も辛い、雨の日夜も辛い。



しかしわたくしは雨の日は静かに本を讀むことが
できるのでありがたいと思ふ。

雨の夜はわびしい。しかし雨の夜は軒の雨だれの
音によく眠らされるので雨の夜もうれしい。

かつては母の搖籃の歌に眠ることを知つたことも
あつたが、父もなく、母もなく、天涯孤獨の身には
夜半の雨だれの音もなつかしい。

窓に近き竹のそよぎも、高鳴る櫓の梢の風もなつ
かしい。

風の日も尊く、雨の日もありがたい。

×

數日前シンガポール攻略戦について一參謀の談話
が發表された。恐らくあの話を聴いたかぎりの日本
國民は胸打たるゝ思ひをしたことであらう。就中、
敵前上陸に際して山下中將が軍艦搭乗を辭して兵と
共に運送船に投じ、兵とともに常に陣頭に在つたと
いふこと、血達磨になつた兵が報告を終り遂げ銃を
したまゝ倒れてしまつたといふことや、プキ・デマ
高地の激戦に、牟田口兵團長が、今夜戦死するであ

らう部下に訣別の言葉をかはしてやりたいと最前線
に負傷しつゝ砲火を浴びて立つてゐたといふこと、
これこそ眞の日本武士の精神を如實に示すものであ
ると思はれた。

戰況危しと見るや、或はマレーの或はコレヒドー
ルの部下を見捨てゝ逃げ去る英米の敵將たちの心持
ちは何としても日本人には想像もつかない。つくづ
く日本人に生まれたありがたさを思ふ。

×

天喜五年十一月源頼義は兵千八百を率ゐて安倍
貞任は兵四千騎を以て黃海に之を邀へ撃つた。風雪
甚だしく頼義の軍は敗れて、左右に侍する者わづか
に六騎となつた。この時頼義の長子八幡太郎義家は
十七歳の若者であつたが、驍勇無雙、その矢面に立
つ者とてもなかつた。そのために頼義父子は辛うじ
て血路を開くことができた。

そのをりの話が「陸奥日記」に載せられてゐる。
相模の國の住人で散位佐伯經範といふ者があつ
た。經範は頼義の身を案じ將軍を探したが如何にし



ても行方がわからない。そこで經範は「我れ將軍に事あること已に三十年、老僕年已に耳順に及び、將軍齒亦懸車に逼る。今覆没の時に當り何ぞ命を同じうせざらんや。地下に相従ふは是れ吾志と、還つて賊の圍中に入る。」といふわけで、六十歳の經範は七十歳の將軍賴義の後を追うて自ら敵中に躍り込んだのである。

さうすると經範の家來兩三騎もまた「公既に將軍と命を同じくし節に死す、吾等豈獨り生くるを得んや、陪臣と云ふと雖も節を慕ふは是れ一なり」と言つて經範に従ひ敵中に割つて入り敵十餘人を殺し枕を並べて討死をしてゐる。

經範主従ばかりではない。この他幾多の家來たちが賴義の身を案じ敵中に將軍をさがし、敵を斬つて死んでゐる。

今度の大東亞戦を見ると、前九年後三年の役ころの日本武人の精神は今日なほそのまゝに傳へられてゐる。

まことにありがたいことである。

×

わたくしはこのころ人生五十といふ言葉の意味をかう考へてゐる。

人間は生き延びたところで先づ五十年である。美しく散る折があらば若くとも散るべきである。「武士道とは死ぬことと覺えたり」といふ葉隠の思想はこゝであらう。美しく死ぬ。戦場で美しく死ぬほど幸福な死に方はない。醜く生き延びても五十年六十年の齡に過ぎない。かういふ考へ方がいかに生命に對する未練さを、日本人の魂からいさぎよく斷ち切つてゐることであらう。この國民性の結果として自然、美しくして散る櫻花に對する愛惜の念を持つやうになる。

それから「人生五十」といふ言葉の裡には、早く悟りを開け、早く慾念を棄てよといふ教へが潜んでゐる。天命を知るといふ聖人の言葉の意味もそれであると思ふ。

俳諧寺一茶は五十一歳になつた年の春「ことしから丸儲けぞよ」とうたつてゐる。言葉はやゝ俗らし



くひぐが、こゝにも尊い悟りがひらめいてゐる。五十一歳になれば、無き筈の命をいたゞいてゐるのであるから、命はいつでも天命にさゝぐべきである。命のみか一切の愛着をも執着をもさらりと捨つべきである。

西洋人風に七十八になつても活動すべしといふ説も否定はしない。しかし五十が定命である、その以後はもう自分の命ではない。天の命、神佛の命であるといふことをわきまへてかゝつてこそ老人の活動も尊くなる。

無論生まるゝ日からこの命は天のものであり、神佛のものであるが、「人生五十」といふ言葉を作つた古人のころ「五十にして天命を知る」と教へた聖人の言葉の意味については考へて見なければならぬ。一茶はまた「死に支度いたせいたせ」ともうたつてゐるが、日本國民はいつも昔から死に支度することを教へられてゐる。だから戦場でも従容として死ぬることができるのである。武士道とは死に支度を致すことである。

かういふ國民性を育て上げたことに對して日本の

宗教の持つ力を見のがしてはならぬ。

×

昨夜からの風も夜半からの雨で、庭の花も大方は散つた。

散り布いた花を見ながら庭を眺めてゐると、そこにも散らさるゝがまゝに散つて行つたものゝ尊い姿が見出さるゝ。静かな佛教的な悟りである。この悟りは静かである。しかしこの日本人的な悟りの力は強い。

東京文理科大學教授
山本幹夫 著

法然佛教とわが國體思想

神國日本の教法として開創された
法然佛教を歴史的に解明して餘り
なし。

價二圓二十錢
送料十錢
會員に限り
送料當方負擔

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館
振替東京 八二一八七



ウエサツク祭

文學博士

井上哲次郎

四月八日の佛陀降誕會は昔からいろいろな名稱のもとに記念されてゐる。一體佛陀は四月八日を以て生れ、十二月八日に成道せられたのである。そして涅槃の日が二月八日となつてゐる。また入滅の日についてはいろいろの説があつて二月十五日といふ説があるが、しかし二月八日も云ひ、三月八日も云ひ、八月八日も九月八日も云ふ。佛陀の一生の重要な時期がみな八日になつてゐるのも餘程注意すべきことがらであるが、尙一層注意すべきことは次の三つの點である。

先づ第一に佛陀が中印度迦毘羅城主淨飯王の太子として生れたのに全く自分自身の切なる要求により出家して乞食僧となられたことである。即ち佛陀は初め一國の太子といふ尊嚴な地位にあり、文武の諸藝に通曉せられ、拘利城主の女耶輸陀羅を妃として迎へ、何不自由なく暮してをられたのである。その太子が出家學道の志からひそかに王宮をぬけ出て、自ら衣冠を脱して沙門となり、各地に師をたづねて歩かれたといふことは他に類例をみないところである。

次にあぐべき點は非常な嚴重な修業をなされたことである。約六年間に亘つて林中にあり、自ら減食等を實行して苦しい修練の行をなされた。この修業が佛陀の精神的事業の基礎をなした。孔子、ソクラテスに於ても、またヤメ、ムハメツドに於てもこれは見ることの出来ないところで、斯く數年もの長い間嚴重な修業をなしたつた精神世界の偉人は他にないと思はれる。

最後に注意すべき點は、斯様に人物の最下等の地位と境遇に下られたのであるが、ただそれだけで終つてゐたなら佛陀にも何の意義もないわけである。しかしこのやうな境遇にあつて、しかも世界萬洲を教化し、數千年の後までも力強く生きてゐる偉大な宗教を建設されたといふことは、これ亦全く他に類例を見出すことの出来ぬものである。

わが國の如きはこの佛陀の教へを受けてから千數百年を経て今日にまで至つてゐるのであるが、さて今日になつてここに注意すべき

ことは大東亞戦争が起つて以來、南方佛敎の國々これまで決してなかつたやうな親密な關係が生じたといふことである。同じ佛陀の教へを繼承してゐるのであるが、南方佛敎では形式の方面を主としてゐる、この南方の諸國でこの形式を大事にして來たわけは、若しさうでなかつたら今日まで佛敎の隆盛を保つて來られなかつたかも知れなかつたためであらうと思ふ。それが日本では佛敎の精神を尊び、佛敎の日本化をはかつたばかりでなく、佛敎の發展に大いに努力してきた。この精神を主とする日本の佛敎と形式を主とする南方佛敎とが手を握り合つて相接するやうになつたのはま

ことに意義深いものがある。また社會に寄與するところも決して少くないと思ふ。

さて印度、錫蘭、緬甸、泰、佛印等のこれ



南方佛敎國に

あつては、毎年五月の満月の宵に佛陀の生誕、成道、涅槃を記念して一大年中行事が舉行されてゐる。これが即ウエサツク祭

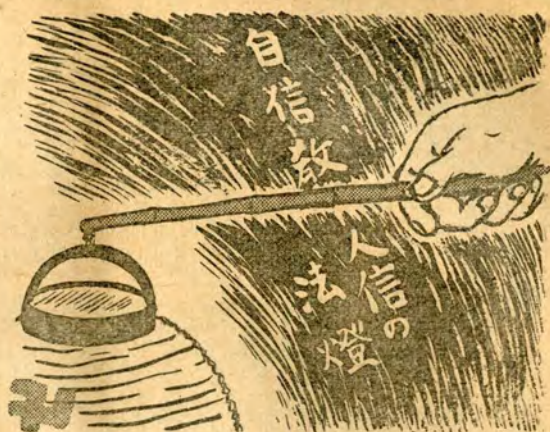
(南方佛陀祭)

である。わが國では國際佛敎協會が主催となつて昨年の七月五日に日比谷公會堂でこのウエサ

ツク祭を催した。その時に同協會の會長である私の所にも南方諸國から非常に喜んでくれ

た祝電や手紙を寄せてくれた。例へば印度大菩提會々々長ムカル博士、ビルマ上院議員大菩提會々々長ツウイン氏、タイ國總督總本山スダスナデイバワラーム寺法主プラ大長老、パシコック泰印文化研究所々々長サツテイヤーンダ長老、その他佛印の越南北圻佛敎總會々々長安南佛敎學會々々長、中華民國の鐵禪大師、謝爲何氏等々から祝辭を寄せられ、年とともにますますウエサツク祭が盛大にならんことを懇願してきた。今年も亦日比谷公會堂で五月の末か六月の初めにウエサツク祭を舉行したいつもりである。

ウエサツクといふのは印度古代曆の第二月目の月の星座の名であつて、佛陀の生誕と成道と涅槃の三つが何れもこの月になされたと南方には傳へられてゐるので、この月にウエサツク祭と云つて佛陀祭を舉行してゐるのである。梵語ではヴァイシヤカ、巴利語ではヴェサーカと云ひ、日本では五月頃の満月の日に當るわけである。(カットは井上博士、寫眞はタイ舞踊ラーミーヤナ踊、文責在記者)



法 話
感 話

或る夜の問答

伊 藤 宏 天

カカル心ザシ、アル人ヲ、阿彌陀佛ハ、八萬四千の光明ヲ、ハナチテ、テラシ給フ也。平生ノ時、照シハジメテ、最後マデ、捨給ハヌナリ。故ニ不捨ノ誓約ト申ス也。

(知恩院藏版元祖大師御法語集後編第二十五章、念佛往生要義抄護念増上緣ノモト)

問テ云ク、攝取ノ益ヲ、カウムル事ハ、平生カ、臨終カ、イカン。
答テ云ク、平生ノ時ナリ。ソノユヘハ、往生ノ心、マコトニテ、ワガ身ヲ疑フ事ナクテ、來迎ヲマッ人ハコレ三心具足ノ念佛申ス人ナリ。コノ三心具足シスレバ、必ず極樂ニウマルトイフ事ハ、觀經ノ說ナリ。

自坊へ住職を仰せつかつてから、間も無い頃のことです。年は若し、意地は強し、何かにつけて刷新とか改革とか、兎角、かどの多い時の事でありました。檀家の年忌法事連夜に參つては、讀經のあとに二三十分の法話を入れる習慣をつけるやうに勤めてゐると、或る日

「今度の和尚さんはお經が高い」と云ふ、不平の聲が耳に達つたので、施主の意見としては、下手な法話などは何うでもよい、其んな間があるなら、もつとお經を長く讀んで欲しいと云ふのであらう。お布施の割合にお經が短かい。お布施を少し出し過ぎたと云ふのであらうと思ひ、幸ひに、施主家から豫め届いて居たお布施の紙包が、其のままであつたので、其れを施主家へ持つて行き、主人は仕事に出て不在ですが主婦に面會して

「承りますと、此の間の法事で、私のお經が高いと仰言つたさうですが、其れは、お布施を少し出し過ぎたと云ふわけでせう。幸ひ

頂いたお布施がまだ其のままにしてありまして、
たから、此所へ持つて参りました。何うぞ惜
しみの懸る程度にお減らし下さい。」

と、差し出しました。面喰つたのは主婦でせう。誰が其んな事を聞かしたのだらう。今度の和尚さんには冗談一つ云へはしない。急に言葉も出ないと云ふ形。

結局は妥協が成立して、お布施も減らされず、お經の讀みつ放しは却つて勿體ない。折角つとめた法事なら、讀むで頂いたお經の一節くらひは、參詣者一同に、わかるやうに説いて貰ふのが本當に好い法供養に成ることだと理解され、其の後は、檀家の法事に法話は付きものと云ふ風に、不文律の中に定つたわけで、時には自縛目縛で、早く済ませて歸り度い程の多忙の中からでも、法事をせがまれて斷りもならず困つた事も度々ありますが、然し、丁度、四大

節などの式日に、校長先生の勅語奉讀の後に一場の告辭のあるのが常識となつて居るやう



に、お經のあとで法語解説が、當りまへになつた檀家の風習は、決して悪いことでは無いと思つて居ります。

斯うした風習が出来てから一二年の間のこととあります。農村のこと、仕事の都合で、夕食の供養をする法事が多くなりました。今日も一軒、其の約束が出来て居る。夕ぐれに参るとして勤行、法話、夕食、雑談の順序で解散となるのは八時頃と見當がつく。月を計つて見ると丁度夕暗の日並であります。提灯の用意が必要。和尚さんに抜かりの有らう管が無い。所が三十人ばかりの參詣者は、暗い野道に馴れて居るせいもありませうが、中には不用意で、手ぶらで来た人もあります。型の通り、驟かな心よい法座が果てて、和尚さんは縁側から一同は門口から、さておひらきとなつた出合ひ頭、

「まあ暗ら」

全く暗らかつたです。雨空で星は無く、ドシヨリと垂れこめた宵暗は本當に暗らかつたのであります。如何に暗い野道に馴れた田舎

者でも當惑したらしいです。其れに不用心で來た者は尙さらであります。斯うなると和尙さんは鼻が高い。用意の提灯が役に立つ。

「寺の方へ戻る方は、これで一緒に参りませう」と提灯を大勢の前へ突き出す。

「では御一緒に」

と檀家のお婆さんが五人うしろにかたまつた。老人達のこと、サツサと歩いては氣の毒に思ひ、少し行つては後に氣を配り、

「皆わかつて居ますか」

と提灯を差し出して見せる。又、少し歩いては立ちどまり

「其所に水溜りがあるから氣をつけて」

と注意をする。其うした心づかひを感謝してか、一番うしろに居つた老婆が、

「和尙さんに提灯を持たせたり、道案内をさせたりして済みませんネ」

と挨拶をした。其れを引き取つた和尙さん

「心配御無用、此れが私の本職だから」

自信に充ちて答へたのだが、五人の同行に

其の眞意は解されたか何うか。和尙さんの眞

意では、導くは住職、導かるは同行。師檀

相ひ携へて行く夜の細道、周囲は何んなに暗くても、一つ提灯の火をたよりに、明るう歩いて行けるこの姿、而も、人の爲にと用意した提灯では無かつたが、われ人共に役立つとは、正しく自信教人信の法燈かと、和尙としては法悦の叫びであつたのであります。

すると、和尙さんの直ぐ後に居る一人が「そりやさうやないか。何うせ一度は和尙さんの御案内を受けるのやもの」

「何うせ一度は？」和尙さんには不可解な此の一句、否、不可解では無くて、不快なこの一句、わざと力を入れて反問して見た。寧ろ、難詰の調子で。然し、相手は至極呑氣な田舎のお婆さん達です。暗夜のつぶて同様、大した手答へは御座いませぬ。

「はい。人間、早やかれ晩かれ、何うせ一度は死なねばなりません。死んだが最後、さきの事は私達には何にも解りません。其の時には和尙さんの御案内だけが手頼りです。何うぞ宜しうお願いします」

正直なお婆さん、思つた通りの返事であり

ます。若い和尙さんには、豫期したことだが

又、其れだけに不満の度が増して來た。

「死んでからの事かネ」

「ハイ、死んだが最後、お先まつくら、和尙さん一人がお頼り、何うぞ宜しう願ひます」

重ねて頼まれて仕舞つた。頼まれたものの返事が出來ません。何と答へようか知ら。冗談を云ふのには相手が餘りに眞誠すぎる。然し、斯うした頼みに答へられるだけの自信が無い。返事を見出すのに困つて居ると、先方では却つて不安になつたのか、三度、

「宜しう頼みまつせ」

と疊みかけて來た。愈々、何とか答へねばならぬ。和尙さん、若氣の至り

「わしや知らぬせ」

思ひ切つて答へて仕舞つた。突き放された

とも思つたのか、相手のお婆さんは

「知らぬとは殺生ナ」

オロ／＼聲で泣きかかつて居る。此のところに若い和尙さんと第三人稱で人ごとのやうに

書いてありますが、當の和尚の私は全く眞剣で
ありました。懐かしい思ひ出ばなし、本當の



感話であります。私は誠意をこめて
云ひました。

「死んでからと云ひますが、其んな
ら生きてゐる間は何うするのです」

「目の黒い間は何うぞ斯うぞ手探り
でやつて置きますけれど、目をつぶ

つたが最後、お先まつくら、私達に
は何にも解りませんから」

謂ゆるお同行と呼はるる善男善女
の餘りにも愚直なる姿に、世馴れぬ

和尚は全く恐縮して仕舞ひました。

「お婆さん、だから、わしや知らぬ
と云ふのです。目の黒い間は何うぞ

斯うぞ手探りでやつて置くと云はれ
ますが、其れが危いのです。氣をつ

けて居てもよく倒ぶのが雪の坂道と
云ふやうに、知つて居ても仲々世の

中は正しう渡れぬものです。其れに
何のあてもなく何うぞ斯うぞ手探り

でやつて行かれるから、先づ横車の押し放
題、横紙の破り放題、恐らく、念々の所作皆

三塗の業と云はれる通りになるのでせう。平
素は其うして置いて、偕ていきが切れたから
宜しう頼むと云はれたとて、私には何うして
上げる力も無い。其の時になつて斷はつた
ら、あんたも困らうから、正直に今から斷は
つて置くのです。」

「其んなら、何うしたらよいのですか」
其れでこそ本ものだ。其の事なら夜通しか
かつてでも説いて上げやう。

「あんた、先が暗いと云ひますが、お念佛
は何うして居ますの」

「お念佛は申して居りますが」
「お念佛を申す者の先が暗うて何うしませ

う。其れは先が暗いのは無い。今の足もと
が暗いのです。先が恐ろしいと云ひますが、

お念佛を申す者の先が恐ろしゆうて何うしま
せう。其れは今の一足が不安なのです」

「其う云ふたら云へぬことも無いでせう」
「否、其うに違ひ無い。眞に生くるものは永

遠に生く。刹那の眞實に永遠の眞實は保證さ
れる。今の一息が永劫につながり、今の一足

が永遠につながれるのであります。故に、今の一息、今の一足を明るう正しうと踏みしめて渡ればよいのです。」

此の提灯で悟つて貰ひ度い。提灯にはお寺の定紋がついてゐる。お寺の定紋はお寺の代表と見る。お寺とは三寶止住のところと云ふ。三寶の要は正信の指示、而も燈火は古來信仰の表示とされて居る。傳燈師と敬ひ傳燈子と懐かしむ。師子、信仰を傳持するに燈の字を以てする。即ち、三寶正信の姿は、明るう正しう和よう世渡りすることでありまう。今お互ひは、此の暗い夜道に在りながら、私の提げた燈火を手頼りとして、何の恐れも、何の不安も、あやまちも無く、各々の家へ戻つて行けるのはありませんか。淨土を求むる念佛者の生活は正に斯の如くであります。あても無く、何うぞ斯うぞ手探りでやつて置くのとは全く違ひます。念佛念法念僧と、一と息、一と足ことに明るう正しう仲よう、目あてを定めて進むで行くのです。お先まつくらだなどと誰が云ふのですか。元の本家へ戻

り行く、親元へ歸つて行く、たのしい旅路では無いのですか」

大して遠い距離でも無い。同村内の檀家のこと。何時の間に歸り着いたのか、氣がついて見ると寺の裏門の前、街燈のもとでの立ちばなし、同行五人への法話ではあつたが、半は自信を語り法悦を述べ、まるで自受用法樂のかたちでありました。

「サア、夜も更けます。お別れしませう。此の提灯を持つて行きなさい」

「イエ、もう直ぐですから入りません」

「其う云はずとお持ちなさい。何うせ一度は送つて上げるのですから」

何うせ一度はに力を入れて、持つた棒でなぐり返す逆効果、電燈のもとに、同行五人は顔見合して微笑笑のてい。

「デワ、お借りして参ります」

と五人は一禮して敷の下を通つて行く。

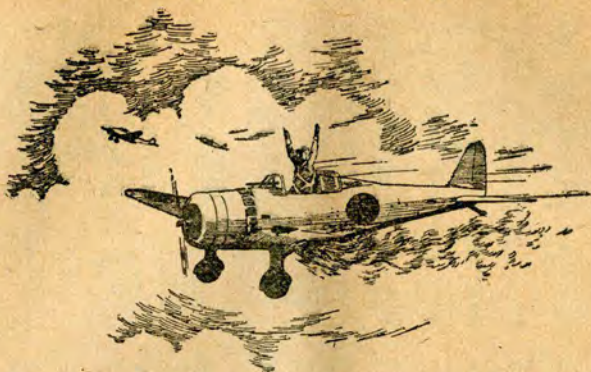
「一寸お待ち」私は一同を呼び止めて

「老少不定、何れが先とはわからぬが、年の順として、私が此所に立ち止り、あんな方が

先へ行くことを、婆婆の別れと申すなら、其の別れぎわに渡した提灯は、恰かも、葬式の引導下炬や中陰つとめのお繰に喩へてよろしからう。さつきには、わしや知らぬぜと根性の悪い返事をして心配させたであらうけれど檀那寺の住職だもの、葬式には引導も渡さう法事も勤めよう。然し、幾ら、冷たいひつぎの前にお繰を上げやうと、其れは死んでから始めて聞かせるものでは無くて、今ここで渡した提灯同様、向ふのお家を出た時から、お互ひに道中を、明るう正しうと照らして來たものを、別れに臨んで改めて手渡しただけのこと、一生涯を明るう正しうと導かれた佛教を、葬式法事の儀禮として、改めて行ふまでのこと、此れさへ解つて頂けたら充分なのであります。サア、お休みなさい」

嬉々快々。本當によく解つて呉れたやうに思へました。私は、尙も後を見送つて念佛を稱へて居ました。和尚としての光榮を感じつつ。夜露にシットリと法衣の袖が濡れて居ました。

淨土隣組座談會



軍國之母

座長 …… 敵高射砲彈を機の胴中

に受け、發動機は火柱を立て翼左肺は燃えて空中分解をし、萬策盡きて燃ゆる愛機に仁王立となり、天蓋を開き兩手打振り天皇陛下萬歳を奉唱して櫻と散り候。由新聞にて承知仕候。蘭貢に白旗を掲げしむる迄は如何で死すべき爆撃に爆撃を加へて大任を果さん覺悟なりしならんも初日において散華せしこと如何ばかり残念なりしか！今日にそなへての教育を受けし身の御厚恩に報ゆる何物もなくして相果てし事定に申譯無候。東雄の心中を察しこの母の胸は張り裂くる思ひに有之候。今日落城の報に心も晴れ蘭貢大

空に日の御旗の續々たる音聞ゆるばかりにて嬉しき限りなく候。東雄儀如何に嬉しからん！この日の待たれしならん！母は早速二本の日の丸を齋壇に供へ候。一本は今は亡き尊き親鸞部長殿の御靈前へ、一本は若鷺東雄へ、いざ部隊長機を先頭に續け伊倉機！輝かしき空中分列式に参加せよかし、母は姿なき入城式に吾子を見送候。

蘭貢に花と散りにし若鷺に見せばやはためく今日の御旗を先は嬉しき餘り右御祝迄主人は職域奉公にて寸暇なきため私代で申上候。可祝

昭和十七年三月九日夜

故伊倉東雄中尉母 いと子

丁造 「今日この耳で蘭貢陥落の捷報を聴きこの眼に英軍の白旗見ゆるばかりにて嬉しきに胸高鳴るを覺候。…」

甲雄 何度讀んでも感激しますな

丙子 わたしただ泣いてしまひましたわ。

戊枝 ほんとにね、親は有難いものです。この親も同じ思ひでせうが。

丁造 母親が子供の武勳を祈る氣持は全く命がけな所があるわい。

座長 皇軍の強さのかけに、こうした軍國の母があるわけせう。

乙郎 軍神稻垣兵曹長のお母さんは南無阿彌陀佛の六字を刻んだ懐中名號を餞別に與へて、これを肌身につけさせ「如來とともに戦ふんだぞ」と教へてゐたさうですね。そして普段からお念佛を唱へるも

のは腹を立て、はいかん、それだけ人間が狭くなる、争ひをしてはいけない、正直でなくてははいけない、嘘を云ふな、恥しい行ひをしてくれるな、無理な欲をするなと口癖のやうに教へてゐたさうです

甲雄 なるほどなア。

要は攻撃精神

乙郎 攻撃精神の貧弱な敵は實に滑稽ですね。バタアン半島の沖で潜水艦を生捕りにしましたね。こちらは負傷者三名、工兵三名で武器一つない小舟艇でもつて堂々たる敵の潜水艦に突撃して生捕つたといふのだから痛快ですな。

甲雄 陸の方にもそんな話がありましたよ。矢張りバタアン半島でウロウロしてゐる敵戦車に白兵で突撃したら手もなく敵は降参して戦車二十一臺を分捕つたといふか

ら大したものですよ。何んのために戦車に乗つてゐたのか判りやしない。

座長 見敵必滅と口で云ふのは易いが如何なる場合もやり抜くことは決して尋常一様ではありますまい。ハワイ急襲の時に、敵を攻撃

しない前に

すでに敵

に當つて火

を吐いてゐ

た荒鷲の一

編隊六機が

いづれも火

を噴く愛機

にしつかと

魚雷を抱へ

て敵艦目が

けて、阿修羅のやうに一團となつ

てぶつつかつて行つた話などは全く凄烈極まるものだつたでせう。



丁造 ニュース映畫をみとつたら俘虜の閼兵といふのがあつたが、婉々として連る俘虜の大軍は見事といふか何んといふか實にあきれたものでしたわい。

戊枝 先日、發表に俘虜が十一萬九千いくらあるとか、これだけで

立派に大軍が出来さうですがね。

丙子 捕虜になつたのは前線にゐた證據だから勇敢なんですつて。

丁造 そんな性根で皇軍に手向ふのがおこがましいことぢや。

皇軍の

有難さ

座長 他國の軍隊の様子を聞いて

初めて皇軍の有難さが身にしみるわけです。蘭印で漆洲軍が掠奪、暴行をやり、彼等の暴力は敵に向

けられなくて背後の無事の住民に向けるばかりだと云ふから味方の軍の方が恐しいことになります。

甲雄 部下を見殺しにして逃亡した最高司令官が米國では英雄になるのだからわれわれには一寸理解出来ない所がある。

乙郎 先方では劣勢な兵力で背水の陣を布くと一段と強くなる皇軍のことが理解出来ないといひます

丁造 他人のふんどしばかりしあてにしてゐる國とは違ふさ。

丙子 わたくし達は皇軍を信頼してゐて、疑ふなんてあり得ないのですものね。

戊枝 だけど何もかも皇軍におまかせしてそれでよいといふわけではありますまいよ。



座長 さうです、我々がだらしたかつたり意氣地がなければ前線の將兵方だつて力を落すに違ひありません。

丁造 作の言ひ草に、内地の氣分がピンピン前線まで響いて聞えるといひおつた。だから我々とても一瞬の油断も出来ませんわい。作のやつは彈の中で暮してゐるくせ

に、わし等内地のことをよく心配して來ますからな。自分の息子ながら申し譯ないと思ひますちや。

甲雄 スマトラの方では婦女子も避難しないで皇軍を歓迎してゐるのとことですが、女子供のゐるのは全く安心しきつてゐる證據ですからな。

安心は絶対禁物

座長 戦争は彼を知り己を知る

ことが第一です。敵は我を過小評價して馬鹿にしたのがそもそも敗ける原因だつたわけですが、こちらとしても彼等を輕くみてはいけません。英米はまだまだ頑張るもの長期持久戦に耐へる國力のあるものと思ふのが穩當でせう。皇軍が南方諸地域を占領しただけ

で安心するわけにゆきせん。これを基として十年でも二十年でも戦ふ覺悟が必要でせう。

甲雄 支那方面でも重慶がもう少しで抗戦を止めるかと考へてはいけぬのであつて、南方地域を段々によくやつてゆく内に自然と大東亞建設に協力させるやうに向けさせなくてはならず、とに角不斷の努力が要るわけですね。

乙郎 南方の油田を確保して、す

ぐにでも石油がどんどん内地に來るやうな考へを持つては近頃の子供にだつて笑はれますよ。日本用といふレッテルこそはつたが、その寶庫から品物を出す段になればこれは又違つた話になるわけですね。よく不敗の態勢が出來たといふが、負けぬといふだけで未だ勝つたわけでないから、英米に止めを刺すまでは安心出來ません。も

う大丈夫だと思ふ心こそ危險極まると云ふべきですよ。

座長 山下將軍が途中の占領地で

一々入城式などはしたくない、ただ一度ロンドンで入城式をしたいと云つた言葉は味ふべきです。これと同じでニューヨーク沖で觀艦式を擧げるまでは警戒を怠れませんが、捨身の戦法我にあり、子孫のためにトコトンまで戦ひ抜こうではありませんか。

甲雄 ベンガル灣から印度洋にかけて海軍の大活躍が開始されましたが、印度方面に作戦するなんて夢のやうですね。

丁造 感心ばかりしてゐてはいかんわい。わしは米國だつて其内にはきつと空襲に來ると思つてゐますちや。本格的な戦争はこれからでわしらは唯やり抜くだけぢや。

雅樂の話

宮内省式部職業部樂長

多 忠 朝

雅樂といふ音楽は、現在我が國に於ける數多い音楽の中で最も古い傳統を有つた音楽であつて、その内容も又擴いものであります。

試みにその内容を種別いたしましたすと、先づ神樂、東遊、倭舞、大和歌、久米歌、催馬樂朗詠等の唱歌することを主體とするところの歌舞音楽、又唐樂、高麗樂の如き全然唱歌することなく樂器のみによる音楽、と又これに相關連する舞樂等が含まれて居るのであります。

そうして、これ等の各音楽歌舞の性質と傳來系統は、どんなものであるかと申しますと神樂といふものは、唱歌することが大體に於いて主眼とされて居るのでありますが、中に

は舞の伴ふものもありますし、樂器のみの部分もあります。が、表題の示す如く神樂に供へるところの極めて聖潔なる歌舞音楽として取扱はれて今日に至つたものであります。

殊に神樂の起原は遠く我が國の神代に逆るのであります。頗る神秘的のものであります。して純然たる我が國粹歌舞音楽であります。その他唱歌することを主體とする各種上記の歌舞音楽は、何れも我が國に於いて始めて芽生へたる我が國獨特の國粹歌舞音楽であります。

唐樂、高麗樂等は共に外國より傳來したものであります。が渡來されて以來幾千年の経路に於いては勿論日本的に淨化されて居ること

は音楽のみに限らず何れの藝術の上にも判然たるものであります。唐樂、高麗樂等もその例に違はぬものと信じます。

然し各曲はその様に日本的に淨化されたのであります。が、各曲の有つ解説歴史は今日でもその儘のものが多いのであります。

これ等の外來樂の我が國に渡來いたしましたのは今を距る一千四百有餘年前、允恭天皇の御代に新羅王が新羅の國樂を我が國へ貢獻いたしましたのを始めとして、三韓、隋、唐並に印度、西域の各音楽が相繼いで我が國へ傳來いたしましたのであります。

此の様な次第でありますから、雅樂とは純日本古風歌舞音楽と並に東洋の古典音楽曲等を總括した名稱であると考へて宜敷いのであります。

以上が雅樂を種別いたしました大要であります。が更に、用ゆるところの樂器の種類を簡單にお話して置きます。

神樂、即ち神樂歌に用ひます樂器は笏拍子、笙、篳篥、竽、琴等の四種の樂器を用ひま

す。即ち四種類の樂器を以つて神樂歌の伴奏の役を果す譯けであります。但しこれは現在宮中に傳へられてあるところの神樂を説明いたしましたもので、現在各地方に残るところの里神樂、神代神樂、單に神樂と呼ぶ笛太鼓或は銅拍子等を用ひて

いたすもの、又、何十何座神樂とか又神社に獨特の傳來と稱する神樂の類等とは全然その趣きの異なるものでありますから、此の點名稱が同じだからといふて混同なならぬ様に御了解を願つて置きます。

大和歌に使用する樂器は、笏拍子、篳篥、神樂笛の三種であります。

すが、時には和琴を用ゆることも又十三絃の琴を用ゆることもあり、神樂笛の代りに龍笛を用ゆることもあります。現在宮中に採用されて居る大和歌には龍笛の方を用ひられ、和

琴は用ひられて居るものと用ひられぬもの、二通りであります。

此の種の説明は誠に複雑となりますのでこゝには省略し後日にお話することゝ致します。東遊に用ゆる樂器は、笏拍子、和琴(大



神樂王陵の面(近衛所藏)

和琴とも云ふ。篳篥、高麗笛(拍笛同じ)昔は中管として、神樂笛と龍笛との中間に細き中管と稱する笛が在つたそうです。丁度拍笛と同じ位のもので音律も殆ど同一であつたそうです。従つていつしか拍笛を用ゆる例と

なり現在では全く拍笛を用ひて居るのであります。

久米舞、五節舞、風俗舞等は何れも龍笛、篳篥、笏拍子、和琴等を用ひて居ります。時代に依りまして久米舞には、神樂笛を使用するが本格的であると云ふ説が行はれ、神樂笛の方を用ひて居つたこともあります。

催馬樂に用ひます樂器は、篳篥、龍笛等の吹奏樂器、及び箏、琵琶の兩絃樂器と笏拍子の打樂器を用ひて歌謡の伴奏をするのであります。この催馬樂は歌謡が主體となつて居りますが昔から樂を主體とするものでありますと云ふ論説が行はれつ今日に至つたのであります。私が私は歌謡が主體であつて樂器は伴奏の用を爲すものとしてこゝに伴奏といふ言葉を用ひました。

朗詠には篳篥、篳篥、龍笛の三管のみを以つて伴奏の役割を果すのであります。

高麗樂は拍笛、篳篥の兩吹奏樂器と三鼓、太鼓、鉦鼓等の打樂器を以つて演奏致します。この高麗樂と申すのは、全然舞樂に關連

したものでありまして、舞樂の右方舞に用ゆる音楽であります。

唐樂、これは世間一般に雅樂とは笙、篳篥、笛で吹奏するところの音楽が即ち雅樂であると簡単に片付けて居られますが、以上の様に

雅樂の範圍内を個々に就いてお話をいたすことになりまして自然皆様は雅樂であると推定されてあるものは雅樂の範圍内のものであります。種類別の上から唐樂と云ふ最初の名稱が出て居りますので、こゝにはお話するに便宜上唐樂と云ふ名稱を用ゆることゝいたします。しかし唐樂と申したところで決して他の音楽ではありません。前に申しましたやうに、皆様が雅樂といへば直ぐに神社、佛閣の祭祀、法要に於ける笙、篳篥、笛を吹奏する音楽と少しも變りはないのであります。此の唐樂に用ひまする樂器は、笙、篳篥、龍笛等の吹奏樂器に更らに羯鼓、太鼓、鉦鼓等の三種の打樂器を加へて六種となし、演奏するを常規といたしますが一步進んで更らに樂箏、琵琶の兩絃樂器を加へて管絃合奏の態とし

て楽しむ場合もあるものであります。誠に優雅高尚なる演奏法であります。

雅樂に就いての所要樂器は太要上記を以つて盡きるのでありますから、これから雅樂の

類別に従つて昔からの用途方面又嗜好方面又雅樂と文士、雅樂と武士、雅樂と貞婦、雅樂と佛教と云ふ様な事蹟に關する逸話等も時局下の今日或は興味あることではないかと考へますので追々此の様な點に就いてお話しいたして見度いと存じて居ります。殊に本冊子は佛教冊子であるを幸ひ、私が平素持論といたしますところの佛教音樂は雅樂を基本と

して建設するが當然であると主張する意見も此の稿の最後に述べさせていたゞき度いと存じて居ります。(未完)

陸海軍病院慰問淨土

寄 附 者 芳 名 (敬稱略)

三 圓	滋賀縣高島郡青柳村青柳	淨 土 寺
一圓二十錢	仙臺市東一番町四泉館内	岩 下 晴 也
一圓二十錢	北海道上磯郡知成村湯ノ里	瀧 谷 シズエ
一圓二十錢	郡山市字稻荷町十八	溝 井 朝 治
一圓二十錢	函館市吉川町七〇	上 杉 典 瑞
一圓七十錢	山形縣新庄町金澤引接寺	花 本 圓 瑞
一圓二十錢	臺灣斗六街斗六	楊 清 香
四圓八十錢	大 阪 市 九 條	磯 部 數 馬
一圓二十錢	濱田市黒川朝日町	松 岡 熊 太 郎
一圓二十錢	朝鮮京城府新堂町四二	吉 見 春 次
五 圓	東京市中野區住吉町四三	清 水 喜 三 郎

俳

壇



太田

耳動子選

北海道陽興軍人療養所

宮島にて 長谷川初男

大鳥居わすれられたり春の潮

評 中七字の見方がよい

柳木縣 大輪 清

子馬連れて博勞やさしき櫻かな
評「やさしき」に依つて如何にも可愛く思
つてゐる様子がわかる

東京市 清水金鈴子

春泥にまみれし蜂となりけり

評 泥にまみれ乍らうごめいてゐる蜂。わ
づかに見えてゐる蜂の黄が目に躍つてゐ
ることも想像せられる

京都市 拜郷 賢三

灯りて伏目勝なる雛かな

秋田市 鈴木 白舟

御殿小さきぼんぼり雛なる

京都市 永田 七郎

沖繩旅行

草に包まれし石ばかり百里の城

高岡市 内山 儒堂

涅槃西風昭南島に合掌す

岩國市 長岡 白朝

歸道や芹摘んで人の今去りし

大坂市 森 正義

琴の音のまろび出でけり雛の夜

満洲國 八木 茂

春の夢ながら戦の事ばかり

東京市 清水金鈴子

雨に濡るる木の芽木の芽の灯りけり

京都市 福島孝治郎

春寒に金魚の紅の沈みけり

名古屋市中 堀 典雄

村中や道とし道の春の泥

岐阜縣 立木 眞敬

菜の花にネルの襦袢の重きかな

小梅市 平井 正念

三月や今年は鯉大漁らし

奈良縣 寺田 惟牛房

軍神の生家は椿さかりなる

京都市 永田 七郎

ありがたやうつむき咲く百合の花

東京市 船津 恩壽生

杉苗のあかき東風が雨運ぶ

東京市 渡邊 貢子

雞の歩み静かに春の草

東京市 田島 茂彦

雪の夜の静かなるとき湯のたぎる

島根縣 石見 千翠

神燈下連判の同志霜白し

東京市 渡邊 一念

春の雪梢にながくとどまらず

京都市 永田 七郎

波静かなる船にあり春の海

滋賀大津陸病 中尾 實

轉りの何時とはなしに静まれり

同 深尾 重三

ゆるやかに鯉のにこらす春の池

大分縣 河野 善隆

高足駄なれば霜解はげしけれ

島根縣 石見 千翠

昭南に御稜威かどやく涅槃の日

東京市 渡邊 貢子

鶯に澄たる朝の静風かな

北海道 富澤 幸雄

鳴鳴いて社の鳥居月明し

福岡縣 村上 静夢

空風に父の夢見を破りけり

奈良縣 寺田 定信

み戦を勝たせ給ひて櫻咲く

東京市 渡邊 一念

雪を着てパス待つ列の人となる

香川県 日向 法圓

早春の風とあそべる笹のおと

山形縣 西澤 正一

春立ちし梅ヶ香包ふ机哉

奈良縣 寺田 定信

梅につぎて櫻咲くなり日のみ國

北海道 花田 順往

ながらへて吾子の勳梅の花

北海道 前野 賢一

春雨や静かに濡れて山館

福岡縣 西山 山博

戦へる國に静かな木の芽ふき

別府 浅輪 桃舟

門前の柳の下に決戦訓

山口縣 山本 壹夫

朝雲に翼乗せけり春の鷹

山口縣 花田 法子

残月に光る葉末となりるたり

横濱市 横井 六甫子

燈管の街ぬかるみて遠蛙

東京府 萩原 通孝

うぐひすの聲聞きながら乳屋くる

越中 佐伯 光安

春雨やけづり落して餅の儼

兵庫縣 水谷 良子

乙女子の髪を飾りて梅の花

茨城縣 眞木 謙太郎

水温む橋のたもとの茶店かな

投稿規定

官製はがき一四二句以内
とし住所氏名明記の上
てに送ること



小説 不孝のも

吉野 翠 幹
齋 藤 清 畫

もう來年は四十に手のとどくといふ私にやつと子供が出來て、しかもその子供——好朗——の初の節句を迎へることは内心雀躍たるものを禁じ得なかつた。兄弟や親戚から祝つてくれた色とりどりの人形を、雛壇に飾つて眺めてゐると、親となつた有難みがつくづく身にしみてきた。

昨日は好朗がお玩具を振つたとか、今日はお膳の茶碗を轉はしたとかたわいない動作の一つ一つに大騒ぎをしながら、親子三人暮しの私達の生活は子供のことで以外に話もない毎日であつた。母乳のいくらも出る有難さに、好朗がまるまる肥へて「これでは子供角力になれさうだ」と、物價が上つても月給のあがらない不都合等はまるで他人ごとのやうに氣にもせず、ただ好朗のすくすくのびる生長ぶりしか頭になかつた。

「さあごらん、あしたは好朗のお節句なのだよ」と私の腕の中ですぐそばを向きたがる好朗を無理に雛壇の方に向けさせ、當の好朗よりも親の私の方が電燈にきらめく人形の装束に見惚れるのであつた。左腕にすつしり重みを感じる好朗の身體の温みと乳臭い匂ひが私の神経を麻痺させて、わけもなく眼がうるんでしまつた。ほんとに嬉しい、有難い。好朗がこんなに私を

喜ばせてくれるものかと今更ながら感じ入るのであつた。親の私はもう先きが決つて、何年経つても偉くなれさうもない。その子供の好朗にだつて立身出世といふ欲張つたことは望むまい。少し位間拔けに育つても身體さへ丈夫であつたら何も云ふことはない。

私は腕の中で手足をばたつかせてゐる好朗にグツと力を入れて抱きしめた。こんな時母が生きてゐてくれたなら、初孫のことだから或ひは喜んでもらへるかも知れなかつたのに、母はその一生を通じて遂に私から一度も喜ばされることなしに死んでしまつた。しかしこれはほんとの愚痴に過ぎなかつた。何故ならば結局母が生きてゐる内は、この好朗も生れる筈がなかつたからである。私は好朗から孝行してもらひたいとは考へたことがない。しかし若し好朗が私のやうに親不孝に育つてしまひ、遂にこの好朗と私がいみあひ憎みあふことになつたら何んなに悲惨なことだらう。今でこそ私の兩腕に纏てをまかせ切つてゐる好朗ではあるが、何年か経つてこの

好朗が私に逆き争はないと誰がいへよう。恐ろしいことである。だが——だが私自身が母親に逆いて、つひ最近まで母と争ひ通してきたではないか。曾つては私をこのやうに兩腕に抱いて恐らく初めの節句に心から喜び祝つてくれたであらう私の母と、私は憎み合つたではないか。好朗がやがて私に逆くやうになつても私としては不満を云ふことの許されない、これこそ自業自得ではないのか。私はここまで考へてまだ見ぬ因果の影におひへるのであつた。一體母が無理を云つても子供の私がそれと争つてもよかつたのであらうか。今になつて後悔の涙を流しても、母に一言の詫びすら云へぬではないか。今までも不孝の子であると私自身よく知つてはゐたが、これ程までに不孝が恐ろしいものと感じたのは初めてのことであつた。

私と母との争ひは正確に云へば私が物心ついて以來のことであると云つていいだらう。私の思ひ出の中には母を慕ふ懐しさといふ甘美さはなにも出て來ない。私の頭に母の勝氣

一點張りりと底知れぬ冗舌さによつて人知れず苦しめられ通した苦い後味しか残つてゐなかつた。この母の傍若無人なまでに振り廻す多辯と強情が、いつも私の若い夢を破り、思案を混亂させ、意氣を沮喪させてゐたのである。母に云はせれば私といふ人間は能なしで意氣地のないくせに底意地が悪いといふ全く取得のないものであつた。だからいつそ私なんぞを相手にしなければよかりさうなのに、母は隣近所に行つては「作は臍拔けた、晝行燈だ」とあけすけ愚痴つて歩き、私に聞えよがしの大聲で悪口を云ふのであつた。

しかし母とほんとに衝突を始めたのは私が嫁をもらつてからであつた。それまではまあお互に云ひ争ふ餘裕がなかつたとも云へる。父が生來の酒好きがたたり、腦溢血でボツクリ死んだのは私が中學四年の秋であつた。弟と妹の二人が學校に通つてゐたので、この切迫した事情からも喧嘩どころではなかつた。弟が學校を卒へて東京に就職して行つてしまひ、妹が縁あつてかたつくまでは、

父のない不幸を早く切り抜けようとする努力から一人一人が精一杯に張りのある生活を續けたのであつた。だが私は女手一つで切り廻してゐる母をみて少しはいたはりたいと思ふこともあつたが、こう思ふそばから私は私にとつて耐へ得られない母の性分によつかつてしまひ、幾度相反する親子の性格に泣いたかわからなかつた。

妹のゐなくなつた後の寮所を母一人に委せておくのも氣になるし、私もいつか三十四歳になつてゐたので、世話する人のいふまゝに結婚したのであつた。こうして親子三人の新生活は楽しい筈のものであつた。殊に母にしてみれば苦勞も一段落といふ形でこれからは少しは楽しみも出来ようといふものであつた。ところがこうした希望や期待は私の結婚後僅かに二月にして望み得ないことが判つてしまつた。私が少し位氣がきかなくても、従順一點張りの女と結婚しなかつたのが悪かつたのである。母と妻との反目は日と共に激しくなつて行つた。母と妻との間で毎日もちあ

がるいろいろなことを數へ挙げれば際限のないことであつた。母にしてみれば妻のすることは何事によらず半端であるし、だまつて見てゐる位なら自分でしてしまつた方が餘程早くて氣持がよいに違ひなかつた。しかし妻の方では何う骨折つてみても結局は母の氣に入るわけがないのだから手のあげおろしに叱られる小言をそのまゝ聞き流して勝手に仕事をやり通すより外に方法がないといふ具合であつた。親戚のものが遊びにでも來れば、母は早速に「家風にあはぬ嫁は、さつさと自分から身を退くのがほんとうである」と聞へよがしにまくしたてるといふのであつた。

日増しにつのるばかりの母と妻の不和には私の方が參つてしまつた。私の勤務先きである譯で仕事をしてゐてもとかく家の不愉快な出来ことが氣になつて仕方がなかつた。うつかりぼんやりしてゐて、そのために事故を起しそこなつてはハツとして冷汗をかいたことも再參であつた。鐵道のやうに危険の伴ふ職業では、一寸の油斷も許されないのに、毎日

の體々とした氣持では何時事故を起して、命を落さないとも限らない。

ある時、母の氣持が和らぐやうにと考へて、芝居の前賣を三枚買つたことがある。しかし母は「そんな暇はない。」と何うしても觀劇にゆかなかつた。妻は妻で月末の支拂ひにも足りない安月給で要らぬ切符を買ひ込んだと云つて腹をたてゝゐた。

たまの休みに私が家にゐても誰も殆んど口をきくことがなかつた。私が妻と二人で自分の部屋にゐようものなら母は大聲で私を呼びたてた。母が「今日は天氣がよいから何處か遊びに行つてをい！」と妻にだけすゝめる様子から、母は三人一緒に家の中にあるのが我慢出来ないのかも知れなかつた。

私はこんな生活の重荷に耐へられなくなつてしまつた。私は隨分と考へた。あれこれと迷ひ抜いた。しかし矢張り妻を實家に歸して別居するより外に打開の方法が見出せなかつた。私が妻に別居するのだと告げた時、妻は勿論驚いた。悲しみ泣いて詫びもした。

ある日、夕食がすんで私は思ひ切つてこのことを母に相談してみた。私の心の奥には別居すると云へば私のことも少しは考へてくれて、義理にでも一應は引き止めてくれるかも知れない、「藤枝

(妻の名)がもう少し氣をつけてくれさへすれば好きこのんで小言を云ふわけでない」位のことを云ふかも知れないといふ一縷の希望があつたのである。しかし實際はまるで違つて、私の望みの綱は苦もなく断ち切られてしまつた。私が別居させると云つた瞬間、キラリと母の顔に光るものがあつたが、それもすぐ消へて不愛想にただ一言「それもいゝだらうね」と云つたきり黙つてしまつた。私の思惑などは眼中になく再び讀みかけの夕報を眼鏡こしにみてゐる母の横顔に出會つてしまひ、私は胸がつまつてそれ以上は何も云へなかつた。母の態度にはお互ひの歩

み寄り等はそれこそ微塵も感ぜられなかつた。逆に私が「しばらくの間別居してみる」



といった生温さが不厭であつて、きつぱりと「離縁する」と云ひ切らせたかつたのかも知れなかつた。

氣のせいとその翌日から母は大部機械がよくなつた。今まで私が歸宅して、閤をまたぐと目のさきに迫ってくる家の中の不安な空氣も感ぜられないやうになつた。私は愚かにもこれは母の氣持が多少和らいだからなのであるまいかと思ひ始めた。壓迫され通しであつた私の氣持が、それから數日の間だけでも例へ誤りであつたにしろ、ゆつくりと家の中の休息が味へたのはせめてもの幸せであつたのである。何故なれば次の休日にはこのたわいない望みも事實といふ光の前に霧散してしまつたからである。

朝寢をして頭がぼんやりしてゐた私は、廊下にてねそべり、新聞を讀んでゐた。すると母が私の側にやつてきて「藤枝の荷物は何の位持たせてやるのかい」と頭の上からいきなり私に質ねた。私はこの言葉に電氣をかけられたやうにムクク起き上つた。私は自分の迂

潤さ加減にあきれてしまつた。恐らくこの數日間母は妻に實家へ持たせて歸す荷物をあれこれ考へてゐたのであらう。それなのに母からこうして別居の催促を受けるまで、私だけが何にも知らずに安易を貪らうとしてゐた自分の甘さにわれながら腹が立つてしまつた。

こんな具合で私の結婚生活は僅か一年半にして終つたのであつた。今でも妻があかく泣きはらした目をしばたきながら、身の廻り品を片づけ、慣れぬ手つきで、荷造りしてゐた妻や、その側で母がいかに手際よく手傳つてゐたのが目に浮ぶ。いまにも降り出しさうな雨模様の日であつた。寒さに片手で肩掛の上から顔を埋め、片手に大きな包みをさげて去つてゆく淋しさうな妻の後姿を眺めてゐて、私は母の無慘冷酷さを憎んだことを憶へてゐる。

やがて春になり夏となつた。そして秋も過ぎようとする頃になつて初めて妻から長い手紙を受け取つた。それによれば別れてからの

妻の悶々の情は私の想像してゐた以上のものであつたらしい。私が妻に一度逢ひたくなつて用もないのに實家の近くを歩き廻つたと同じやうに、妻も亦驛の附近をさまよつて私の顔をさがしたらしかつた。そして手紙の最後に、母が何んな無理を云つても今度こそ決して逆かないこと、別居生活のその日その日に性も根もつきはて、強情どころかすつかり人が變つたと云はれてゐること、そしてもう一度一緒に暮させて欲しいといふことが述べられてゐた。

私だつて無理に別れてはみたものの、今更ながら自分の身の廻りに手数のかゝるのに閉口してゐたし、夜中に眼覺め勝ちの淋しさと聞ひながら一日として妻を忘れたわけではなかつた。だがせかし、めつきり老けてしまつた母の姿をみるにつけ、母の生きてゐる間には結局は妻を歸すわけにゆかぬと思ふのであつた。

丁度別居してから二年目のことであつた。あれ程までに強健で、かぬ氣で通してきた母

が一寸した跪きから他界してしまつた。ある日、母は別に急ぎもしない用事であつたのに、踏切を汽車より先きに越さうとして土手から轉落して、肩の骨を折つてしまつた。それとも何か考へごとをしてゐたために汽車の來たのに氣がつかかなかつたのかも知れなかつた。

私が知らせを受けて馳けつけた時には、近所の醫者が輸血をしながら「何分にも内出血が激しいので困つたものだ」と云つてゐるところであつた。やがて醫者が歸つてからは私獨りで血色の悪い、時々苦痛を訴へてゐる母の顔をみつめてゐた。こんなにやせてゐたのかと思ふ程。母のやつれが目立つて見えた。一日として樂が出来なかつた母であつた。私は取りかへしのつかぬ悔ひの念で一杯だつた。せめてこんな時、妻でもゐたら二人して看護が出来たものと思はぬわけにゆかなかつた。さう思ふと同時に若しもこのまま母が死んだら、その時は妻と暮せるのだといふことが通り魔のやうに私の頭をかすめた。さう



思つてから私はわねながらこの恐ろしい考へに全身鳥肌のためのを憶へた。私はかりにでも親の死ぬことを期待しはしなかつたであらうか。如何に不孝なもので、まさかにそんなことは出来る筈がない。しかし何うしてその時妻のことが頭に浮んだのであらう。

妻が馳けつけた時には母の意識はすでに朦朧として妻の大聲で詫びる言葉も耳に入らないらしかった。私も亦親に孝行の眞似ごとでも出来得る機会を永遠に失つてしまつたわけである。

かうして私はたつた一人の親を失ひ、忌日も明けて妻との同居が始まつてしまつた。足りやうもない安月給をその日その日の生業にふり當るのに急がしく、つひ月日を過してしまつた。

そして好朗の初の節句を迎へた

わけである。

私は好朗を抱いてゐなかつたら申し譯なさしに思ひきり泣いたかも知れなかつた。私は自分の罪業を自分ばかりとらなくてはならないのである。そしてこう思つた。「明日の節句をこのまゝ獨り喜んで祝つてゐるわけにはゆかない。その前に母の墓の前でせめてお詫びだけでもして來なくてはならない。さうだ、なるべく朝早く母の墓に詣つて來よう。」

◎是非御試用下さい

にんにく粉末
固形にんにく
そてつの實

特約店大募集中です

静岡市上香谷町

神谷昌孝

電話二八六三番

信 仰 相 談

(質問 歡迎)

當 擔 中 村 辨 康

赤 兒 の 信 仰 と そ の 冥 福

(奈良縣・山邊郡・上島乗玄)

(問)

此頃義理の兄の赤兒が急死致しました。まだ生れて十月位にしかありません。今まで無信仰で居た兄も此頃は赤兒の後生を願ふ氣になり、頻りに阿彌陀さまにすがつて赤兒も自分も救はるやうにと念願して居ります。このやうに生後間もなく死んだ赤兒は淨土往生が出来るものでせうか、親としては是非阿彌陀さまの救ひに預りたいのです。そして私自身も人事でなく萬一にも自分の子供が信なくして死ぬ場合があつてはなりませんから、今のうちに彌陀の救ひを知らせて置きたいと思ふのですが、何うしたらよろしいでせうか。私の子供は昨年の夏うまれましたのです。

(答)

第一の問題、即ち信なくして死んだ子供の救ひと云ふことですが、之れはお父様の求道に依つて救はれると思ひます。直ちに淨土往生は出来ないにしても、お父様の求道入信がその御子さんの「死」に依つて導かれたものであることは、誠に大きい効果であつて、赤ん坊御自身の救はれたよりもより一層大きな救ひが成就されたのですから、その功勳だけでもそのお子さんの功德は大したものであります。そして一面にこのお父様に依つてお子さんへの追善回向が繰返へされ常にその冥福が祈られるでせうから、その幼ない命が生前中阿彌陀佛への信仰を領解

するだけの暇も力もなかつたとて、必ずその向上と覺悟とが促がされて救ひが完成されることでありませう。

元來「阿彌陀佛の救ひ」は永遠の昔から完成して居るのではあります、私達はそれにきづかないからこそ輪廻をつゞけて居るのです。それでこの輪廻を續けて居る間の状態をば一般通念として「まだ救はれて居ない」と云つて居ります。無論救ひを氣付いたか氣付かないかのけじめは實に大きいのです。つまり救ひを氣付いたことに依つて、それからの精神活動なり生活なりに大變な相違を來たすからであります。然しながら大乘教に依れば必ずしも自分の解脱をのみ問題とはして居りません。衆生無邊誓願度は菩薩の第一目的だからであります。だから自分の死に依つてお父様の求道心が呼び起されたならばそのお子さんは立派な善知識の役目を果たしたのであり一分の菩薩行をなしたものであります。

然しお父様なりお母様なりとしてはそのお子さんの冥福を出来る限り祈つて上げたいで

相 信 談 仰



夜、百日、誕生日等に宮詣をしたり祖先のお墓参りをしたり

せう。それがまた残された者の務めとして當然なことでもあります。が、實は務めなどと云ふやうな言葉ではまだビツタリしないです。う。もつと深くもつと切實な氣持で追善回向せずにはをれないことと存じます。

此頃教學新聞の奥田さんが初めてのお子さんを失はれて「愛兒に別る」の一文を寄せられ私も拜見して大きな感銘を受けましたが、丁度あなたの問題が提出されて居りました。親の氣持は誰も同じと見えます。誠に御同情に堪へません。

次に第二の問題、即ち頭はない赤兒へ何うしたら信を興へ得るか云ふことですが、是れは親が代ることより外に方法がありません。古來から懐胎したとき、胎兒の爲に母親が三歸戒を代つて受けるのも夫れであります。また胎教をやかましく云つて居るのもそれでありませう。七

するのまた子供と一緒にありますが子供に代つてするところの母親の務めの一つであります。ですから主として母親が愛兒の爲に代つて信仰を求め大いに信仰にとむべきであります。無論お父様もなさる必要があります。両親揃つて信仰に精進するならば、た

お 百 度 は 迷 信 か

(問)

私の老母は中々の信心家でございますが、古い信仰で何か事があるとお百度を踏みます。私はお蔭さまで「淨土の信仰」に喜んで居るものですが、母の信仰を「迷信」として時々説得しますけれども私の力が足りないのです、すこしも納得を得ることが出来ません。何卒「お百度」が迷信だと云ふことをよくわかるやうにお教へ下さいまし。

(東京・目黒・後藤照順)

(答)

とお百度詣りと云ふのは元とは神社佛閣に百回御詣りして或る一つの祈願をこめることを言つたもので、切なる至情を表する行爲であります。或は千度參詣して祈願をこめた例もあります。何時の頃から始まつたものかよくわかりませんが、鎌倉時代から有つたことは事實で東鑑に出て居ります。もつと古い處では藤原時代に百度ではありませんが「熊野へ三十三度」と云ふ文句などがあります。それが後世になつて本堂や社殿を一廻りしては拜禮しつゝ出直さないで一日中に百度お詣りすると云ふ便法を生じ、遂に、

とへその子供の命に萬一のことが出来ませうとも、その兒の後生善提は必ず増進されることとありませう。外に方法はありません。両親が信仰に依つて普段の動作や不用意の言葉の中に自然に子供への薫習感化を興へることが唯一の方法であります。

「百度石」を建て、その石から本堂なり社殿なりの間を百回往復すればよいと云ふやうになつたのであり、百度石のない社寺でも門又は鳥居から本堂又は社殿の間を往復するやうになつたのであります。

則ち初めの頃は主として遺瀆ない感情を以て行はれたものであつて、無論功利的な氣持も、あつたには相違ないが、それは社會がまだ發達して居ない爲であつて、それをなす人としてはむしろ感情のはけ口を其處に見出したのであります。然るに段々人間が利好になつて來ると、百日の參詣を一日ですますことになり、もつと甚だしいのは「四萬八千日」とか何とか、人間が勝手に日をきめて、その日に參詣すれば四萬八千回御詣りするのと同じ效果になるなどとしたのは、むしろ淺聞し墮落した氣持ではないかと思はれます。

然しお百度が迷信か迷信でないかはそれ自体としては決定的なものではありません。その人の心狀如何で決せらるべきものであります。ですからあなたの母親の場合、おかあ

様の御氣持を承らないとそれが迷信であるとの決定は出來かねます。然し一番親近して居るあなたが仰るのですから、あなたの御言葉に間違ひはありませんまいが、それにしましてもあなた御自身の阿彌陀佛への信仰が果して正信であるか何うかを反省することなしにお母様の信仰のみを批判することはゆるされなれと思ひます。

と云つてあなたの信仰が迷信的要素を含んで居ると云ふのはありません。それはまだあなたの御信仰を全然承つて居ないから

輪廻と無生忍とは

(問) 愚問で失禮ですが、誰に聞いてもよくわからないのでおたづねする次第です。

一、無生忍と云ふこと。

二、輪廻と云ふこと。

前記二問御多忙中恐れ入りますが、ごく

であります。然しながら「阿彌陀佛への信」を確信する人の中にも、中々多分に



迷信的なものを持つて居る人が居りますから、敢へてそれを申し上げて、もつと御自分の信仰を吟味し反省して見てその上でお母様の御信仰の正しさを御もとめになるやう御すゝめいたします。随つて今はお母様のお百度に對しての批判を差控へて置きます。

やさしく御教示願ひたうございます。

(長野縣・下伊那・荒井勇)

(答)

初めに第二問から申し上げます。則ち輪廻と言ふことは「輪のやうに廻

る」と云ふことで、心にきつぱりとした定まつたものがあるから、あちこち迷よつ



てぐらつて居り、自然行爲もまた定まつたものでなく、其時の都合次第でぐらつて居ります。生きて居る間でさへさうですから、死んだのちともまたフラ／＼して居て「輪廻」の状態を續けて居るので、それを言つたのが輪廻と云ふことです。よく「誰も見て來たものはない」と申しますが、推理上それは決して間違ひではありません。

「未來の果を知らんと欲せば現在の因を見よ」と云ふ言葉がありますが、現在の生活をよく吟味すれば私達の輪廻して居る實狀を知ることが出來ます。常に利害損得毀譽褒貶の八風に動かされてグル／＼舞をさせられて居るのが私達の實狀です。それを大きく分けると、六通りになりますから「六道輪廻」と云ふわけです。道とは人間の歩く路即ち生活のことです。

一、嫌や／＼でたまらないけれども是非共仕なければならぬと云ふ生活

上の苦しみ——現在の地獄道

二、食ふためにあくせくして居る生活、行列したり、闇で買ひためたり、近縣までもあさりに行つたりする生活苦——餓鬼道

三、何が何だか分らず、ただ無茶苦茶に働いて居る生活——畜生道

四、他人の利益を得たことを聞いては羨み、人の出世を見てはねたむ。まことに浅ましい人間心理です。其の上惡口でも言はれると直ぐ腹が立ちます。——修羅道

五、人並みのことはしたいが中々出來ません。その癖、悪い方は人並みをすぐ眞似たがります。——人間道

六、樂好み、精進好きは萬人共通かも知れませんが、功成り名とけての隱居ならまだ許されませうが、若いくせに金持ちのブラ遊びは絶対に許されません。然しそれを望まない人が幾人あるでせうか。——天上道

かうした六通りの氣持を反省すれば如何に私達がこの六道を輪廻して居るかとおわかり

であります。生きて居てさへ六道輪廻です。から、この現在の因から類推して當然未來の結果もまたこのやうな「輪廻」であることが推定されます。

これから離脱し得る確信に達したのが次の「無生忍」であります。

無生忍とは「輪廻生死の無くなることを確認することであつて「無生」は「無生死」の略であり「忍」は「認」であります。

即ち如來の本願を信じて名號を執持し稱念すれば必ず如來の無量壽の中に歸一することが出來ると云ふ信に到達したとき、必然的に六道輪廻の羅網から脱却し得るとの目安がつき、生死の海から離脱することが出來るとの確認が得られます。

これ即ち信仰に依つて「無生忍」を得たのであります。

則ち無量壽の中に安住することを得る確信が得られるから生死を超越することが出來るのであります。



善助のお母さんは善助が五つの秋に死にました。その年は善助の住む町に大變傳染病がはやりましたが、お母さんが親類の家に看病に行つた時うつて病氣になつたのです。また善助のお父さんは炭焼人で近所で評判の働きものでしたが、お母さんが死んで三年経つた多のこ、突然起つた地震のために死んでしまひました。お父さんがいつものやうに山の中で炭木を伐つてゐた時に地震が起り、逃げる隙もなく崩れ落ちた土の下になつて死んだのでした。善助はとうとう一人ぼつちにな

童話 鬼 と 善助

牧 野 醇

つてしまひました。

やがて春がきて二月三日の節分になりました。どの家からも黄昏の空をふるはせて、「福は内、鬼は外」と勇ましい豆撒きの聲が聞えてきました。どこの家でも楽しさうに笑ふ聲

がもれてきました。しかし善助は一人ぼつちで淋しくなつて、かう考へました。「どこの家でも福ばかり呼んでゐるので、僕は鬼を呼んでみようかな」と。そこで善助は小さな聲で「福は外、鬼は内」と云つてみました。

すると臺所の方で急に物音をさせて大勢鬼が入つてきました。赤い顔や青い顔、牛のやうな角や猪のやうな牙のある鬼たちがいかにも洗んだ不景氣な顔つきをしながら、善助の圍りに集つてきました。

「お前は どうして俺たちを呼んだのだ」と赤い顔の鬼が云ひました。

「友達になくて淋しかつたからだよ」

と善助は答へました。そして鬼と善助とがこんな話をしました。

「淋しいなら福の神を呼べばいいではないか」

「だって福の神は忙しいから僕の家に来てくれないと思つたのさ。鬼は何處でも追ひ出されて可愛さうだから僕が呼んでお友達になろうとしたのだよ」

「俺たちと友達になるのだつて、お前は俺たちの恐いことを知らないな」

「知らないよ。だけど鬼だつて悪い者ばかりではないのだから」

「馬鹿、俺達はそんなに甘くはないぞ、俺達は世の中不幸にするのが仕事なんだ。お前をもつと不幸にしてやるから覺悟しろ」

そして鬼たちはまた墓所からゾロゾロに出てゆきました。鬼たちは一たん外に出てから、何か相談しました。そして

「今日は忙しいが、時々来るぞ」と

善助の方にどなつて何處かに行つて終ひました。善助は近所の家へ手傳ひに行つたり、食べものをもらつたりして暮してゐましたが、何しろ兩親のゐない一人ぼつちなのでお腹をすかせたまま寝てしまふこともありました。ある夜のこと矢張りお腹が

すいて仕方ありませんでした。

た。そしてその日隣りの小父さんから

使ひをたのまれて町を歩いてゐた時に、丁度通りかゝつた大きな邸の中からとても美味しさうな臭ひがして來たのを思ひ出しました。

多分お夕飯の支度をしてゐたのでせう、速く



の方までその臭ひがただよつてゐたので善助はお腹がギユウギユウ云ふのを感じました。しかし、善助にはとてもあんな美味しさうなものは食べたたくても買へるわけがありません。そこで「我慢をしよう、僕は御馳走なんてゐらないや」……とつぶやきながらいつの間にか晝間の疲れで睡入つてしまひました。

その翌日善助が目を醒ましてみると、枕元のところに見たこともない御馳走が澤山置いてあるのにびつくりしました。

肉のてり焼にお菓子までついてゐました。善助は急いで顔を洗つて、いつものやうに御佛壇に「お父さんお母さん、お早う」とごあいさつをしてから、御馳走の匂を臭いでみました。するとどうでせうこの御馳走は昨日邸の中から臭つたのと同じ匂ひがして、昨夜寝る時に「まあ、要らないや」と思つた御馳走だつたのです。

それから善助の毎日はほんとに楽し

いものでした。善助が町に出て餅を焼く臭ひがしたので餅を食べたいと思ひましたが、わざと「僕は餅なんて要らないや」と云ひました。するとその翌日にはちやんと枕元まくらもとに焼いた餅が置いてありました。また善助が街を歩いてゐて赤いりんごを食べてゐる子供をみて、りんご等らうどはなくてもいいやと思ふと、その翌日には枕元に赤いりんごが置いてありました。このやうに欲しいのですが、わざと要らないと思ふものが、あくる朝になるといつも枕元に置いてあるのです。善助は一體誰が枕元まで持つて来ておくのか一度見たいものだと思へました。ある晩のこと善助はいつものやうに床に入つてから寝たまねをしていつまでもおきてゐました。その内に近所でもすつかり寝たのでせうすつかり静かになりました。時計が一時を打ち二時を打ちました。すると風の音に混つて誰かの足音が響いて來ました。善助はうす目を開けて誰だらうと見てゐると節分の夜に逢つたことのある赤い顔をした鬼が出來たてのお菓子を持つて入つて

來るではありませんか。そして鬼は善助が見てゐるのに氣がつかず枕元にお菓子を置いて歸つてしまひました。

それから先きも毎日毎日善助は鬼からいろいろのものを貰ひました。しかし善助はそれを決して一人で食べ切つてゐたわけではありません。近所の世話になつてゐる家の子供にやつたこともあります。町を歩いてゐて不幸な人に出逢ふとその人に分けてやつたこともあります。ある時には善助は自分で食べず全部をやつてしまつたこともあります。

このやうにしてまた節分になりました。その時も善助は「福は外、鬼は内」と云ひました。すると、また鬼が出て來て善助に云ひました。

「俺を甘く見てはいけないぞ。世の中の不幸な者は太陽が黒くなるまでは決して斷へないのだ。お前は仲々にいゝ人間だが、善いことをしてゐても必ず幸福ばかりが來るとは限つてゐないぞ。もつともつと不幸になつてもよいといふ覺悟をしておけ」

× ×

善助はいつか大人になりました。山に入つて炭焼きを職業にするやうになり、鬼から食べ物を買ふこともなくなりました。そして善助は今ではもう老人になつてしまひました。二人ゐた子供の内で長男は山で死んでしまひ、娘一人を相手に暮してゐました。

ある夜のこと善助は娘と爐の端に座つて自分の長かつた一生についてかう思ひ出を語して聞かせました。

「わしは子供のころに鬼と仲良しになつて、鬼からいろいろ御馳走を貰つたものだ。そのおかげでとても助かつた。だが、鬼がいづつも「その内にもつと不幸が來るぞ、覺悟しておけ」と云ふものだから、いつ不幸が來てもよい覺悟だけはしてゐた。わしは先づ第一に火の用心をして、毎晩かまどや爐の火を消して、灰の中に手を入れて火の氣のないのを確かめて床に入つたものだが、それでゐて何ういふわけか、お前が三つになつた時のこと火事を出してしまつた。しかもこの家が火

元になつて近所の家にも大變な迷惑をかけてしまつた。わしはその時、これも鬼の云ふ不幸が來たのだと思つて、覺悟が出來てゐたからあまり取亂しはしなかつた。それから長男を死なした時もさうだつた。わしは炭木を伐るのは毎日の仕事に違ひないが、決して油斷をせず一本一本注意して倒してゐた。あ



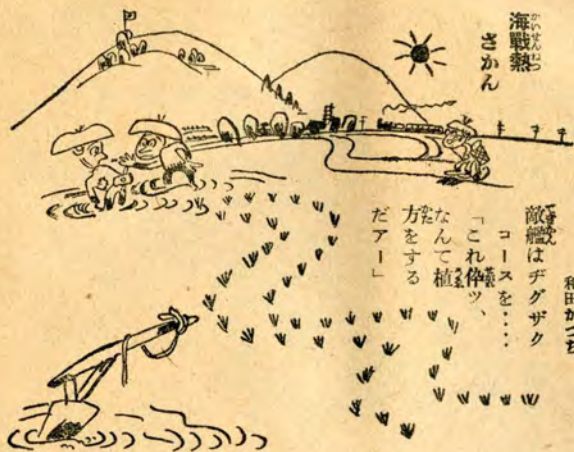
の時もわしは十分注意して木を倒す前にあの子が離れて遊んでゐるのを見とどけてから倒したのに、とうとう木の下じきになつて死んでしまつた。メリメリと大きな音がして木が倒れてゆくのに、あの子はその時に限つて一散に駆けよつてきた。倒れる木の下に向つて駆け込んだやうなものだつた。わ

しは無残に下敷になつて死んでしまつた子供を抱いて泣くにも泣けずぼんやりしてしまつた。わし位不幸な奴は他にないと、その時こそは自分の不運を嘆いてしまつた。だがわしは自分の子供を助けられなかつたが、自分と二人して死なないで済んだのがせめてよかつたと思ひ直した。

それからお前にしてからが矢張りさうだつた。お前の友達が皆東京に勤めに出てしまつて、お前も随分東京に行きたがつたものだ。それは都會はきれいだし、便利だ

し、華やかなのでわしもお前の氣持を無理だとは思つてゐなかつた。それが近頃お前の友達は何うだれ、皆田舎に歸りたがつてゐるではないか。庭の草や山の木が、春夏、秋冬と變つてゆく美しさ、鳥の聲、蟲の聲、空には白雲、谷には水のせくらき、こんな當り前のことが都會の人には見たくも見られない。先日遊びに來た娘さんが鶯の音を聞いてびつくりしてをつたではないか。鶯は籠の中で鳴かすものと思つてゐるあの娘さんはお氣の毒である。わしは炭焼こそしてゐるが、幸か不幸かの見きめだけは知つてゐるつもりだよ。かう善助は自分の娘に云つて聞かせ、そして思ひ出したやうにつけ加へました。

わしは鬼にもつと不幸な時が来るぞと教へられてきたが、ほんとは鬼に助けられたことになるわけだ。鬼の奴めはわしが要らぬと思ふものをくれ、欲しいものを奪つてしまつた。しかも幸も不幸もほんとはわしの胸の中に生きてゐることを教へてくれたのは鬼のおかげなのだ。



五月漫更だり

漫更協団

つい癖で
川口 久
「アラッ、奥さま
三點落ちましたワ
ヨ」



「アナタツ坊やが
目をさましますワヨ」
南方の日本語
古田久三郎

南方五月晴

川口久

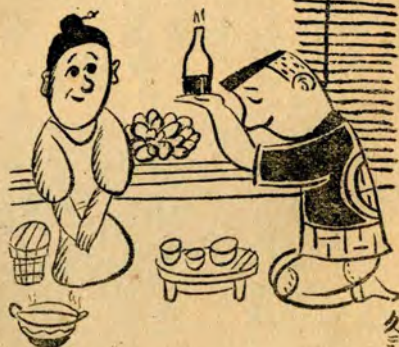
「オイ故郷の女房が
男の子を生んだとよ」



祝
ひ
酒

「兵隊さんでは遠慮なく頂きます」

古田久三郎

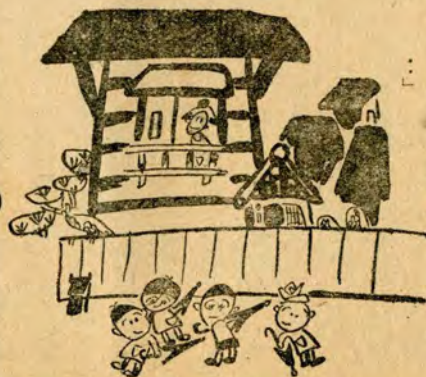


久三郎

落下傘部隊
「僕落下傘部隊の勇士だい」

「ボクモ」
「おやまア洋傘がないと思つたら」

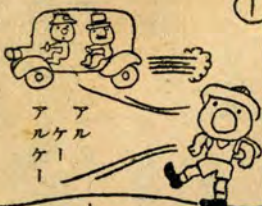
和田かつち



歩徒は夏初

久口川

①



②



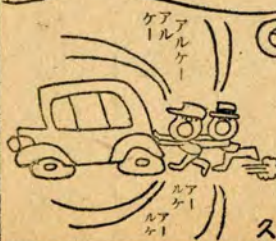
④



⑤



⑥





鹿兒島支部の誌友會

本會鹿兒島支部では同支部創設者たる小橋麟瑞師を久し振りに迎へて去る三月十四日午後七時から同市不斷光院に於て本誌々友會を開催し、小橋師の「法然上人を現代にあらしめば」と題する講演を聴きこれが終つて座談會を開き盛

特志寄附者芳名

左の通り本會活動資金にと特志寄附下さいました。

金七圓六十錢

王子區赤羽五ノ一六一善徳寺

隈部正雄殿

況裡に散會しました。

辻中尉滿洲だより

酒をザルで貰ふ

南に擧る目覺しき戦果を聞いたリ讀んだりしてゐると、ただちつと北をにらんでゐる丈では何んだか相濟まぬ氣がします。只今の所は正に王道樂土の滿洲です。物資不足とか云ひますがまだまだ贅澤です。只寒さ丈です。一寸油斷してゐると酒まで凍ります。酒をザルで貰つてくることもあります。部屋の中は全部目張りして衛生的にはよくありません。しかし我々は演習その他外にゐる方が多いので先づ長續きします。實戰的ス

キーの猛訓練をやつてゐます。す。しかし北滿の町は建物が小さく、入口が狭く窓は目張りで何んは相當なもので何んでもありません。冬も、

六月號から本會々費(年額)を

金一圓五十錢に改正いたします

お知せらと願ひ

會員各位を初め各方面の御後援によつてますます會運の隆盛をみてをりますことを厚く御禮申し上げます。さて今回郵税の値上げにともなひ、本會々費を年額金一圓五十錢(郵税共)に改正いたします。實は一昨年開催いたしました理事會に於て會費を一圓五十錢に改正いたすやう決定いたし何故會費改正をせぬのかとお問合せに接してゐましたが、本會の趣旨から一冊でも多くの方に讀んでいただくために實費以下の値段にて本誌の頒布をいたしてゐました。所が郵税の値上げのこともあり又いよいよ本會活動の使命の重大化して來たために、この會費改正を實施いたすことになりました。何卒御諒承下さいまして倍舊の御援助御指導の程を偏へに願ひ申し上げます。(保)

りの氣分をじつと味つてゐます。に寒くても戦ひは出来ず。
しかし演習は日々に猛烈でどんな

辻重光中尉

翼賛選舉の誓

一 選舉も大東亞戰爭完遂の一業です。必勝完璧の固めに皇民わたくし達は眞心もて参加します。

誓つて世紀の新議會を現はさずに措きません。

一 議會の眞髓は人にあります。今こそ議會も清新を要します。皇民わたくし達の代表は、眞に、人の中の人たる、今日の人材を選びすゝめます。

誓つて誤り惑ふことはありません。

一 一票も自己の魂です、清く、尊く、怯みなく、郷土にあらぬますらをの意志にも問うて、皇民わたくし達の任を公明に果します。

誓つて小義や情實にけがすことはありません。

一 わが日本の總選舉です、畏くも民意にお賀しあり給ふ弘き御下問です。皇民わたくし達は忠誠をこめ、大御心に副ひ奉ります。

誓つて小やかな一票たりとおろそかにいたしません

◇兵書に先だつ修養の書として淨土を拜誦してゐます。支那家を改造した吾々の事務室で、早速淨土の頁を繰つて拾ひ讀をしてゐる内に大いに教へらるる所がありました。物を考へる心の豊かな人は土に落ちた病葉に春を想ひ、夏を偲び、秋の愁ひと、生命を完うして靜かに眠つてゆく只一葉の木の葉に何物かを悟る、人の心は豊かでありたいと思ひます。自分が苦しい時程悟り得る好機だと思ひます。(北支派遣第三五六五部隊佐野正)

◇神奈川縣小澤興丈氏夫人千代子さんは生來篤い信仰家と知られてゐたが、惜しくも去る一月二十七日帝大病院で急逝せられた。そして夫人の病氣は極めて稀有のものであつたと聞いてゐたが、夫人は臨終の床中で自ら進んで研究の資材たらんために屍體解剖を遺言して正念往生された。まことに死しても他人のために役に立つことを忘れなかつた夫人は私達に多くの遺教を垂れたものとして感激したのである。(東京市淀橋區東大久保二ノ九三瀧澤遼道)

◇化かされたり化かしたり、化けすぎたり化けそなつたり忙しいことである。狐が化かすのでなく自分が狐に化かされるのである。(愛知縣海部郡津島町中野善英)

◇小生先日病院にて淨土をふと發見いたし、拜讀いたしましたところ精神修養のため非常によく、病室中にて非常に人氣がよろしいものですから小生も是非入會させて下さい。何時退院するか判りませんが、例へ一部でも二部でも早く讀みたいと存じます。(名古屋陸軍病院本院栗田米吉)



舞踊慰問の旅

花柳 壽重

慰問隊一行の旅

一ヶ所でも多く踊り、未熟ながらも一人にでも澤山みて頂きたいと思つて、出来るだけ諸所に行つて慰問舞踊の旅を續けました。そして到る所ではほんとに心から喜んで下さる兵隊さんの顔をみては、私達一同一所懸命になつて踊りました。一行は男二名の女五名で、僅か七名に過ぎないものの、いろいろとお世話下される隊のお骨折は大變なものでした。申すまでもなく戦場では何から何まで、兵隊さんの手一つで處理されてゐるので、その中であつて私達女の者までが、忙しい兵隊さんに世話を焼かせるのであるからほんとに心

苦しいことでした。しかし私達はそれこそお湯を一杯飲みたくなつて、白湯を手に入れるのにも、また某地から某地に移つてゆくにしても、何一つ兵隊さんの手を借りずに自分で出来るものはないのであるから、全く止むを得ないことでした。お手数をかければかける程私達は専心努力しなくてはならぬと思ふし、踊りさへすれば心から喜んで下さる兵隊さんを見ては、矢張り一度でも多く踊りたい、いや踊らなくてはならぬと思ひ、それだけ緊張もするのでした。私達がある部隊から次の部隊へ行くのにトラックに乗せてもらひ何名かの兵隊さんに護られて進むのでした。トラックの上ではうつ

かり他見をしてゐるようものなら振り落されてしまひさうに搖れます。しかしそのトラックの上から大陸の景色を眺めるのは實に壯觀でした。何處まで行つたらはてるとも判らない太平洋の真中をはしる一本道を、トラックの進むに従ひ、砂塵が濺々と舞上り、前も後もまるで見えなくなります。その中を幾時間もの間進み、やつと次の部隊にたどりついた時には可成り疲れてしまつて、少しは休みたい氣持になります。しかし集つて来る兵隊さん達の顔をみ、兵隊さんの折角待つてゐてくれた氣持を思ふと、それまでの疲れは何處かに一度に消し飛んで夢中になつて踊ることが出来ました。

砲聲を聞きつゝ踊る

ある時のこと、第一線に歸るのだと云ふ兵隊さんたちと一緒に汽車に便乗を許されて、私達一行は浙江から更に二千二百軒程も離れてゐる地點 南昌へと出發しました。これ

まではとても内地では想像もつかないやうな
涯しなく曠がつてゆく平野が續き、すつかり
小麥が色づいて美しい夢の國を旅するやうで
した。が今度は山また山の連續で、人家一つ
見られない寂漠たる中を私達を乗せた汽車が
ばく進みます。

そしてやがて私
達は南昌驛に到
着しました。

驛と云つても
小さな寂しいも
のでした。驛の
前には大きな川
が流れてゐます。
川の向ふ岸には
細く南昌の街が

横たはつて見えます。川の真中には島があつ
て、ここで激戦があつたと聞きました。南昌
の玄關とも云ふべき南昌大橋は驛のすぐ近く
に架かつてゐます。この橋の長さが一軒以上
もあるとか、さすがは大陸で、こんな奥地に



(委 踊 舞 の 者 筆)

こんな大きな川が濁流滔々と流れてゐるには
驚きました。

この南昌大橋を歩いて渡れば十五分以上は
かゝります。三分の一ほど渡つて行くと、敵
のために爆破された橋の残骸が川に没して

ゐるのが見られました。わが皇軍が占領して
から工兵隊が大變な苦心をして架橋したとの
ことでした。そこから更に私達は前に進んで
最前線の〇〇部隊を訪れました。間に合はせ
の急造りとは云へ、仲々よく出来てゐる舞臺

の上で踊つてゐると、時としては可成り劇し
く、また時にはまばらに大砲の音が響いて來
ます。一發々々敵を撃滅してゆく砲聲を聞き
ながら舞ふ慰問舞踊に私達の五體は云ひしれ
ぬ緊張を憶へました。しかしこんな前線で、
こうして集つて下された兵隊さん達の顔をみ
ると、まるで銃砲聲が耳に入らぬかのやうに
平氣で朗かな様子をしてゐるのに反つて驚き
ました。全く元氣一杯な兵隊さん達の態度に
掌を合せたいやうな力強い頼母しさを感じ
ました。

「壯絶馬鹿しつかりしろ」

私達の踊りがすんでから、係りの方が病室
を案内して下さいました。病室に一歩足を踏
み入れると、そこには傷ついた勇士たちの幾
つかの表情があり血みどろの軍服が一瞬にし
て私の網膜を刺しました。私はその壮烈さに
打たれてしまひ、暫しの間は茫然自失の態で
ありました。嵐を呼ぶ感情、さうです、私の
感情は雲を呼び千々に亂れて吹きすさぶ嵐と

なりました。果してこれが現實の世界であらうかと、自問自答して見すにはあられませんでした。然し決して夢ではない。全くの現實として展開されてゐる一つの光景だったのです。

意氣地のないことに——え、敢て意氣地のないことにと申しませう——私は暫し緊張の餘り顔面がすっかり硬直してものもよく云へず、意思なき人の如くたゞ默然として立ちすくんでゐました。その時です、私の横面をかりとばすやうに突然隣の室から大聲が發せられました。

「馬鹿！ しつかりしろ！」

と物凄（ものご）い聲（こゑ）が響（ひび）いて來たのです。まるで私が叱（し）られたやうに驚（おどろ）きました。私は何（なん）こゝであらうかと、勇氣（ゆうき）を奮（ふる）つて聲（こゑ）のする室（む）の方にゆき、そつと内部（うちぶ）のぞいて見ました。そこには傷（きず）いた一人（ひとり）の兵士（へいし）が軍醫（ぐんい）から治療（ちりやう）を受けてゐるところでした。その兵士（へいし）は敵彈（てくだん）のため左手（ひだりて）の指（ゆび）を五本（ごほん）ともとられてゐるのでした。そして

「部隊長殿にすまない、すまない……」

と喚（こゑ）いてをられるのでした。そのまた側に立つてゐるのはその兵士（へいし）に附（つ）きそつて來た方（かた）



(影撮念記ので隊部〇〇)

でせう、その方が負傷（ふけい）した兵士（へいし）に對（たい）して大聲（おほい）で叱（し）叱（し）してゐるのです。この聲（こゑ）が私の耳（みみ）を驚（おどろ）かせたのです。

「馬鹿（ばか）！ 五本（ごほん）の指（ゆび）を失（な）くしても前線（せんせん）へは立（た）派（は）に行（い）けると云（い）つてゐるのがわからんのか」

かう云（い）つて側（かた）から傷（きず）つた戦友（せんゆう）をどなるやうに叱（し）る兵隊（へいたい）さんの兩頬（らなほ）にもきら／＼と熱（あつ）い涙（なみだ）の露（つゆ）が光（ひ）つてをりました。

あゝ何（なん）んと云（い）ふ美しい、そして壯（たけな）んな光景（こうけい）でせう。見てゐる内に私は思（おも）はずワツト大聲（おほい）あげて泣（な）き叫（こゑ）びたいやうな衝動（しょうどう）に驅（か）られてしまひ、そこに立つてゐることが出來（こ）まませんでした。私は急（いそ）いでそこを立ち去（さ）り、係（けい）りの方（かた）には失禮（しつれい）とは思（おも）ひましたが、私（わたし）獨（ひとり）りで外（そと）に出て、誰（たれ）れもゐないところに立つて思（おも）ひきり泣（な）きました。第一（だいいち）線（せん）同胞（どうぱ）の神（かみ）にも似（に）て崇高（そうかう）な、淨（じやう）化（け）された精神（せいしん）の現（あらわ）れを、こんなにはつきり私の目（め）の前（まえ）で見（み）せられて、何（なん）うしようもない悲（かな）愴（そう）な感激（かんげき）の涙（なみだ）でした。泣（な）いても泣（な）いても涙（なみだ）のある限（かぎ）りしすまらない感激（かんげき）でした。

九江での思ひ出

次の日（ひ）にはまた他の部隊（ぶたい）に行（い）き踊（おど）りました。このやうにして何回（なんかい）かの舞踊（ぶおど）を終（お）り南昌（ななつ）とはお分（わ）れしました。再び揺（ゆ）れるトラツクで一本道（いっぽんみち）を砂塵（さじん）をたてゝ進（すす）みました。丁度（ちょうど）通り

かゝつた兵隊さんや、遠くの民家にゐて私達一行のトラックを認めた兵隊さんまでが、こちらを向いて手を振つてくれました。刻一刻と部隊から離れてしまふ私達の氣持はそこにある兵隊さん達に申し譯ないやうな氣がして實に淋しいものでした。僅か数日のお馴染みに過ぎないとい

は云へ、實はほとんどの兄弟と分れてゆくやうな何んとも云へぬものでした。それから私達一行が〇〇から〇〇の間を通過する際に、敵

彈の洗禮を受けたり等して、幾日かの旅の後九江に到着しました。

九江は交通の要地で、狭い街が二つた返す涅槃ぶりでした。ここでは旅館の娘さんに



(者筆る踊で上船送輸)

舞踊を教へたりして、微笑ましい想ひ出の幾つかを残しながら、九江を最後の慰問地として水路南京へのコースを辿り歸路につきました。丁度その頃の揚子江はすつかり減水してゐて、九江の岸邊からみると、一千噸内外の船が幾隻も棧橋に列んでゐるのがすぐ目の下に見られました。

「死・死・死」の「恐怖」

潮流にのつてはしる汽船は矢のやうに早く進みました。ところろがその途中で、敵の機雷網のあることを知らされたのです。船長は一同を集め、最悪の場合を豫期して「皆さん覺悟してゐて下さい」と沈痛な面持で云ひ渡しました。その一瞬間船内は水

打つたやうになり、寒々とした思ひで包まれました。多分その時の私の顔は土色に變貌してゐたに相違ありません。「死、死、死、」わけもなく私の頭の中にはこの言葉が馳けめぐり、我れながら情ないと思ひました。こんな揚子江の濁流に吞まれて一生を終るなら、戦線に立つて敵の集中射撃を浴びて華々しく散つてゆきたいと思ひました。私は死のさまぐの幻影に脅かされながら一言も發することが出来ず、ただ船員の一舉手一投足をおつと見つめてゐるばかりでした。少しでも船員から視線を外さうものなら、今にも機雷に觸れて船も人も木ッ葉微塵に爆破されてしまひさうな氣がして仕方がないので、一分、二分……こんな無氣味な沈黙が續きました。船長から悲憤な言葉を聞いてから、何の位の時刻が經つたのでせう、悪魔のやうな永い永い時間、そうその時はかう思ひました——何か二日も三日もの間、そのまゝ地獄のふちにおつとしてゐたやうな氣がしました。しかし實際は、この危險區域を通り過ぎる

までに一時間位のものだったのです。やがて船長が私達に明るい表情を向けて、「皆さん危険は去りました」とさも何んでもないやうに云つた時には、全く私達は手を取り合つて激しく慟哭しました。船長のこの簡単な言葉によつて私達が救はれた思ひでした。あゝこれで救はれたのだ、死ななくてもよいのだと硬直し切つた感情が次第にとけて遂には狂喜の渦と化しました。

後から思ふと僅か一時間しか要しない危険區域突破ではあり、前線の兵隊さん方にはほんとに恥かしい氣がしていくら女でも、少しだらない思ひがしたものの、あの死の危機に直面した恐怖の念は、とても忘れられない貴重な體驗だと思ひます。

南京から一路歸途へ

私達は九死に一生を得たのです。日頃は餘り信仰心のなかつた私も、あの時ばかりは神佛を念じました。またその時、神佛の御加護を受けたとしか考へられなかつたのです。奇

蹟と云ふ言葉のひらめき、これもあの時の實感には當てはまりません。やはり神佛の御加護です。

このやうにして南京に着きました。

城外にある南京驛は上海行き急行の發車を前にしてこつた返してゐました。その中で若い女の係員が大變活躍してゐるのに注意がひかれました。

やうやく無事に第一線將兵慰問の重任を果して、汽車に乗つた時には自分ながら喜びと感激のもくもくと湧きあがるのを何うしようもありませんでした。間もなく列車が發車するでせう。歡喜に打ちふるへた眼を以てはる

か向ふに廻る南京の城壁を眺めてゐると、いつか目がうるんで霞のやうに見えなくなるのでありました。

會のたより

東京本所・西光寺で
四月七日盛大に開催した

法然上人を鑽へる夕べ

四月七日は法然上人の御生誕の日です。この日本會では午後六時半から深川區千歳町西光寺にて、同寺後援のもとに「宗祖上人を鑽へる夕べ」を開催しました。定刻すでに本會々員並に同信の人の百五十名が會場を埋める盛況でした。先づ國民儀禮があつて、赤尾光雄師道師のもとに戰歿英靈追悼の回顧があり、佐山學順師の「ハワイを語る」と題する興味深い講演を聴きました。次いで演野義光師の紙芝居「蜘蛛の糸」の口演があり、佐藤良智師解説による「法然上人御一代記」の幻燈があつて、參會者はみなはるかに上人の御遺徳をしのび、今後の活躍に一段と期するところあり静かな鑽仰の夕べとして意義深い會を閉ぢました。



法語
解説

日本國體に養はるるもの

法然上人法語(その五)

中村 辨康

法語

われ淨土宗をたつる心は、凡夫の報土に生るゝことを示さんがためなり。

もし天台によれば凡夫淨土にむまるゝことをゆるすに似たれども淨土を判ずること淺し。もし法相に依れば淨土を判ずること深しといへども、凡夫の往生をゆるさず。諸宗の所説異りといへども、すべて、凡夫報土に生るゝことをゆるさざるゆへに、善導の釋義によりて淨土宗を立つる時、すなはち凡夫報土に生るゝこと現はるゝなり。

〔法語抄一七一八「淨土隨聞記」〕〔勅修傳卷六〕

解説

宗教は決して夢を追ふものではありません。何處まで

も、人間の生活を中心として居るものであります。然るにそれが現實生活よりも未來の死後の方に重きを置くやうになつたのは、時代が然らしめたのであります。則ち源平争亂から幕府封建の壓制時代が徳川末期まで永い間續いたからであります。權力の強大な者に對してはたとへ『是』であつても『是』にならず『正』であつても『正』として通用しなかつた爲に、少數の權力者に對して例へば「泣く子と地頭にはかなはぬ」とか「長いものには巻かれる」とか「無理が通れば道理引つこむ」とか云ふ諺がしめすやうに、頭のがらぬ一般大衆としては何うしても現實生活を理想的に營むことが出来ませんから、いきおひ未來にこそ本當の淨き楽しい生活をしたいのものであるとの念願にもえざるを得なかつたのであります。

大體我が國に於ける佛教は

一、奈良朝から藤原末期まで——現實的

二、鎌倉期から徳川期まで——未來的

三、明治時代以後——現在未來を通ず

の三期に區分することが出來ます。

即ち初めのまだ思想的に深いものを持たなかつた頃は凡てを現實的にのみ觀察したり理解したりするのは蓋し當然なことでありまして、どんな民族でも必ずその過程を経るのであります。然し餘りに現實的になるとつい享樂の一面のみが進みすぎて却つて弊害を醸成することになります。あの藤原末期の頹廢思想がよい例であります。深氏物語に見るやうなだらしない上流生活が社會的排斥をも受けず、現代人から眺めると、覺醒しなければならぬことを、紫式部とも云はれる上流の教養の高い婦人が平氣で書いてゐる程に其の時代の一般風潮が私達の想像し難いまでに頹廢して居たことが想像されますが、その時代にはちつともおかしくなかつたのであり、中流以下の人達はむしろそれを理想として自分達もさらした生活をしたいと望んで居たであらうことも推察されます。それでそれを遂に實現し得たのが平家の公達でした。それまでには一方ならぬ

苦心があつたわけですが、その苦心の結果は公家の眞似をして享樂生活に溺れたのであります。そしてまた、間にその牙城まで崩潰させてしまつたのであります。

この源平争亂のち幕府政權が出來上り謂ゆる「強い者勝ち」の階級無視勝者絶對權の世となつたのですから、正しく圓靜堅固の末法時代が到來したのだと意識したのは無理ありません。随つて今までの極端な現世享樂思想は逆に現實否定の思想と變化してしまひました。

「恐ろしい世の中だ」

かう云つた氣持が非常に濃くなつて行つたのでした。それは本當の宗教がなかつたからであります。現實的な宗教はありましたが、その現實が頼みにならないのですから何の役にも立ちませんでした。魂の安定がつかないのです。死んでも生きても「六道輪廻」から抜けられないのですから、何うしても落ちつきを得ることが出來なかつたのです。後世の史家もこの時代のことを「王法佛法共に力なし」と云つて居ります。

此の時に現はれたのが法然上人の淨土教でした。煩鎖な修行でなしに手取り早く『出要の道』即ち『六道生死を離する要道』を一般大衆の前に説き示したのであります。

力を持たない一般大衆は現實を何うすることも出来ません。武家政權の前に「泣き寝入り」するより外はなかつたのです。ですから『せめて未來は』とそこに望みをかけないわけに行きませんでした、その頃の宗教はそれに對して暗黒でありまた迷路でもありましたから、全く立つ瀬がなかつたわけでありました。

ですからこの時代の人々の心を救ふ途としては、現實問題には觸れず、未來の魂のおちつき場所のみを取り上げなければなりません。本當の理想世界に永遠に生活すること、そのことのみが中心的に考へなければならぬことがらでした。そしてそのことの可能が本當に人心の不安を除去する唯一の途であつたのであります。

法然上人は人々に、その人々の要請して止まない理想の世界が、完全にそして誰をもこばむことなくちゃんと用意してあることを示してくれました。

然しその理想の世界は元來何う云ふ内容を持つべきでありませうか。これは容易な問題ではありません。餘程の卓越した人でない限り『これこそ最高最勝のものである』との決定は出来ないことがらです。

經典に紹介された淨土は、藥師如來の淨瑠璃淨土とか阿

閻如來の妙樂淨土とか或は釋迦如來の無勝淨土とか色々あります。觀無量壽經には韋提希夫人の爲に色々な淨土をお見せになつたと説いて居ります。即ち七寶淨土、蓮華藏宮、自在天宮、玻璃鏡宮などでありました。これ等の淨土は無論立派なものでありましたが、韋提希夫人の要求にはピッタリはまりませんでした。具體的な人間の要求とは異り理窟ばつて居たのではなかつたかと想像されます。それで具體的な阿彌陀の淨土をのみ、要求したのであります。また無量壽經には阿彌陀佛の光明相が諸佛に立ちまさつて居ることを云つて居りますが、それもまた「阿彌陀の淨

膽力
強化

小心恐怖症

法新正矯
呈進明説



◇小心恐怖症◇悲觀症◇羞恥癖◇内氣性◇お
くびや癖等無闇に人を恐れて物事に大膽さ
がなく少い事にあつてはよく知られたる如く
目上の人を恐るゝ等の人科は早く其惡癖を直さ
なければいけません。勉強學科は出来て大失
試験場や他人の應對に成功の第一歩に堂々と
じいつまで経つても成功の第一歩に堂々と
り出す事が出来ないかやうな人も短時間で乗
勝朗となりどしどし他人に打ち勝つ時々に急
ハガヤ申込次第「内容説明書」無代進呈す

申込所 東京市澁野川區西ヶ原町三四六

瑞穂社研究所

「土」が諸佛の淨土よりも一段とすぐれて居ることを證明して居ります。法然上人は「十方に淨土多けれど西方(阿彌陀佛の淨土)を欣ぶは十惡五逆の衆生の生るゝゆゑなり」と述べて居られます。すなわち「何んな罪ふかいものでも決して見捨てない」と云ふのです。これで見ると諸佛の淨土は『條件つき』であつて『罪深いもの』の入國を拒絶して居るのです。それは丁度濠洲が『アングロクソン』民族以外は入國させない白濠主義を取つて居るのと同じやうな制度です。然るに阿彌陀佛の淨土は何んな人種でも差支ないのです。即ち『土徳』と云つて阿彌陀佛の淨土はその國に往きさへすれば自然に皆な『善人』になつてしまふのです。最惡最低のものまでが救はれて最高最善のものに變化せられるところに宗教としての最も高い最も立派な内容があると云はねばなりません。随つてその理想表現の淨土がやはり立派なそして完全な内容を持たねばならぬのは當然なことですが、完全な國體に養はれて居ないこと、何んなに智識のすぐれた人でも自分の組織的な智慧に惑されて、淨土に對する批判が歪曲されるのであります。例へば天台の開祖智顗智者大師の如きがそれであり、智者大師は維摩經略疏第一の中に次のやうな四種の淨土

を立てゝ居ります。

一、凡聖同居土(凡夫と佛と同居する世界)

二、方便有餘土(二乘及び地前の菩薩のすみ世界)

三、實報無障土(地上の大菩薩の生を受ける世界)

四、常寂光土(法生法身の佛のみ居る世界)

第一の「凡聖同居土」には淨土と穢土と二種類あつて、お釋迦様と凡夫とが同居し得るやうな世界を「凡聖同居穢土」と云ひ、阿彌陀佛と念佛の衆生と同居する極樂淨土の類を「凡聖同居淨土」と言つて委しくは五種に別けますが、それは順次に高位のものとして居ります。このやうに淨土に對する見方が抽象的な純理的なものと最も高位と考へて居るのですから、結局は空理空論に墮ちてしまつて居ります。さればこそ自分自らがそれに満足することが出来ず、死に臨んで前に自分が低く評價した「彌陀の淨土」への往生を要求したのであります。智者大師自身に理論と實際との矛盾を持つて居たのであります。これほどの智者にして尚ほ且つかうした理論だほれをして居るのは確かに支那と言ふ國柄に生長した結果であり、正しい國體觀念の把握がなかつたからであります。

また法相宗の元祖慈恩大師は彌陀の淨土を他受用報土と

言つて地上の菩薩の爲の淨土であるとしたので、煩惱を斷盡しない凡夫はその報土に往生することが出来ず、念佛して往き得る世界は化身の淨土即ち化土でしかないと思つて居るのであります。これは佛の力を自受用他受用の二種に分け、自受用は自分自らを樂しませる働きであり、他受用は他人の爲に役立たすところの働きであり、自受用の方が本來的なものとして居ります。これはまだ自利的な氣持が抜け切れて居ないのであります。

更にはまた世界中で一番正しい我が日本の國體の中に生かされた人でさへも、封建時代の誤まつた制度の中に育つたものは、本當の國體に就いての認識が出来て居ませんでしたから、やはり自分の智慧にまけて「淨土」の觀念を誤つてしまひました。例へば問師の如き四十八願に對する「三願七種」の考へ方がそれであります。これは「主權者」と「領土」と「國民」との異つた三要素が寄り集つて「一國家」を形成して居ると見て居るのです。謂はゞ支那式であり西洋式であり封建式であつて正しい國家觀とは言はれません。畏れ多いことながら、我が國に於いては、上御一人の大御心は國民の凡ての上に注がれ、全國津々浦々の隅々にまで行き渡つて渾一體をなして居るのであり

ます。陛下と國家とに對する國民の忠誠心は不可分のものでありまして、三つの異つた『要素』などと云ふやうなそんな水くさいものではありません。この國體に養はれた法然上人の『淨土觀』はまたこの我が國體の如き内容なり屬性なりを持つたものを理想として居るのであります。宗教的天才であつた善導大師の指南に依つては居りますけれども、それを更に一步進めて三者一體の立場に立つ上に、更に特に『無量壽』なる無窮性を強調して居るのである。一層日本的に特長づけられて居るのであります。善導大師も阿彌陀の無窮性を認めては居りますが、現實的な養ひを受けて居なかつた爲か、その無量壽性よりもむしろ『光明性』の方に重點を置き、生活よりも詠嘆的に無量光

畑中俊應 著

ビルマ遊記

B 6 版七百六十餘頁

定價 三圓五十錢
本會々員に限り
特價 三圓十五錢
送料 二十錢

佛教國ビルマにあつて久しく彼等と共に住んだ著者がビルマの一般風俗、信仰の内狀を紹介するため、かつて甲子社より出版せるもの。

殘本僅少、お申込には「本會々員」と明記されたいし
申込所 法然上人鑽仰會

相をあくがれたのであります。然るに法然上人は光明よりも壽命の方に重大さを認め、詠嘆して行くよりも日常に念佛の一念一念を強く確かめつゝ煩惱具足のまゝの現實生活を喜び勇み清く楽しく營んで行く「至誠心」主義の信仰を主張されたのであります。

天台宗のやうに幽遠な理想を高く評價するあまり、現實的國家觀を低く見るものも間違ひです、三論宗のやうに自利を重く見た結果、權力者の霸道政治から脱却しない特權階級的な國家觀でしかありませんから、それらはみな間違つたものであります。それでは折角の彌陀淨土の持つ正しさが發揮されません。

そこをはつきり最も正しく發揮させて「凡入報土」の淨土を顯示したのが、淨土立宗の中心の理由であると言はれたのがこの御法語であります。日本に生れた限り何んな惡人でも「大和魂」を持つて居るやうに、如何に煩惱具足の凡夫でも念佛して淨土の人となる限り、みな悉く「上善人」となり「阿鞞跋致」となり如來の『一生補處』となつてしまふのであつて、煩惱を滅盡してしまはなくはないの、地上の菩薩でなくては入國させないのと云ふやうな差別は全然つけて居ないのであります。

この點が法然上人の宗教が獨り純粹に日本的性格を保持して居るとなす所以であります。

法然上人以前の宗教が多分に支那思想を混在させて居るのは止むを得ないとしても、法然上人以後の宗派が幾分でも天台等の支那思想を混入しなければならなかつたのは誠に残念なことであります。これは鎌倉幕府以後徳川幕府に至るまで、霸道政治體が繼續した結果であり、實際上の國民生活教育力の及ぼした結果であります。然るに大政奉還に依つて日本本來の國體が正しい姿になり、國民精神の中樞たる忠誠心が小さな主君へ向けられたやうな分裂状態でなく、天皇御一人に絶對的に歸一し奉ることが出来るやうになつたから、宗教上の信仰もまたこの現實の力に保育されて、今までのやうな現實を無視して未來にのみ重きを置く形態を取る必要もなく、現實と未來とを通じ現實二世を一貫した形態にやみがへつて來たのであります。此の故に今の私達こそ本當の淨土の信念を把握し得る光榮に浴して居るのであります。さればこの日本の國體に養はれた我が淨土の信仰こそ、本當の宗教信仰であり末法萬年の後までも『獨留此經』を約束された教であることが合點されるのであります。

編輯後記

◇「三級浪高うして魚龍と化す、
痴人猶ほくち夜塘の水、まことに
氣もちのよい句であります。」

◇禹門三級の大流は餘り大過ぎ
るので、大抵の魚はこれがほれ
ず流にうようよしである。ただ
鯉だけが勢ひがよくて大流を跳り
上るがそれでも大部分は巖角に頭
を打ちつけて死んでしまふ。しか
し上りきつた鯉は忽ちにしる龍と
なり風を呼び雲を起して天に舞ひ
上る。

◇おろかな人が鯉をとらうとして
塘の水を夜中までかきつてくみほ
してゐるが、成勢のいい鯉はそん
な所にまごまごしてゐない。と云
ふ意味であります。

◇端午の節句を祝つて大空になが
れてゐる鯉は何れもやがては風雲
を呼んで龍と化すことでありませ

う。いつまでも勢ひのよい鯉が塘
の中でまごまごしてゐると思つて
ゐた米英の指導者たちは、この勇
猛果敢に艱難苦に打ちかつて進
む鯉の意地を測り誤つて大敗に傾
んでゐます。

◇他を知ると同時に我を知るもの
は百戦危からずと云ひます。わけ
なく大東亞其氣國が建設されると
思つたり、米英が間もなく参ると
樂觀するものは他を知らぬもので
せう。戦ひはまさにこれからであ
ります。

◇卓事は強い、一億國民は一心と
なつてゐるといふだけで安心し切
つてゐるものは、我を知らぬもの
でせう。生活を最低限度に切りさ
げて職域奉公に誠をつくすことは
勿論ですが、これを何年にも居つ
て困苦に耐へ抜き長期戦を戦ひ通
すといふ持久性が大切なのであり
ます。

◇かうした心がまへは理窟からは

出て来
る。

あります。

◇御指導を戴き深謝いたします。

◇多忠朝先生から御多忙中を玉稿
を頂きました。先生は二千六百年
の祝祭に際しては多くの雅樂、舞
樂を新作され、斯界の普及発展に
努められてゐます。

◇眞野正順先生は大變御元氣にな
り、近く本誌に玉稿をお寄せ下さ
る由であります。

◇中村辨康先生も殆んど御全快に
なられ一同安心致しました。

◇郵便料金が値上げになり、書誌
の送料も變りましたので何卒お問
違ひのないやう願ひます。

◇お問ひ合せには必ず返信料同封
でお願ひします。

◇一昨年の理事会で決定してゐた
會費値上げもいよいよ實行いたす
ことになりました。何卒御諒承願
ひます。(村瀬)

浄土 五月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和七年四月十日印刷納本
昭和七年五月一日發行

(定價十二錢)

東京市芝區芝公園十五號明照會館
編輯兼 眞野正順

東京市芝區芝公園十五號明照會館
印刷人 赤尾光雄

東京市牛久保區牛久保町七
印刷所 大日本印刷株式會社

配給元

東京市神田區横路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人禮仰會

東京市芝區芝公園明照會館内

振替東京八二一八七番

「浄土」購讀規定

一部定價 金十二錢

(送料一錢)

會費 金一圓五十錢

一ケ年 (送料共)

腦の病・神経系統諸症・神経痛
腦溢血・鼻・耳の病・不眠症

綜合的優秀藥

光明丸

主治效能

腦神経系統諸病、神経病、腦神経衰弱、不眠症
てんかん、腦膜炎、ヒステリー、小麻痺（ヒキ）、兒麻痺（シケ）、腦
梅毒、梅毒、腦溢血、半身不隨、心悸亢進症、
逆上、耳鳴、腦貧血、頭痛、鬱血、（肩首コリ）
神経性（耳病）、神経性（鼻病）、記憶力減退、
思考力減退、精力減退、健忘症、性的神経病一
切、神経性變屈症、小心恐怖症、恐迫觀念、憂
鬱症、誇大妄想、取越苦勞、雜念妄想、多夢症
胃腸障害、便秘症、神経痛、ロイマチス、關節
炎、以上ノ諸病ニ用ヒテ著効アリ

價		藥	
六	日	十	日
分	貳	分	參
貳	圓	五	圓
圓		圓	
圓		圓	

全國有名藥
店、一流百
貨店ニアリ
品切ノ節ハ
直接本舖へ
御注文下サ
イ

試供藥と
説明書を

進呈

京都伏見いなり山

謹製領藥元 願 成 閣

關西代理店 大阪 合資會社 丹平商會分店
關東代理店 東京 株式會社 丹平商會支店